TOTO 通信

2015年 新春号

Toward a Creative Architectural Scene

特集／独学の建築家

Special Feature / Self-taught Architects

独学の建築家

特集

Special Feature:
Self-taught
Architects

TOTO
通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 505
New Year 2015

Contents

特集1
増田信吾+大坪克亘　全体をゆるがす部分の設計
作品「躯体の窓」　4

特集2
前田圭介　現場の経験が後押しに
作品「後山山荘」　12

特集3
森田一弥　職人の目を通したものづくり
作品「御所西の町家」　22

特集4
島田 陽　施主とさがす建築へ
作品「タトハウス・北野町の住居2」　30

特集5
川口通正　和菓子屋から建築家へ転身
作品「磔明 第一期」　38

シリーズ
旅のバスルーム92　文・スケッチ／浦 一也
ロボスレイル（南アフリカ共和国）　46

現代住宅併走28　文／藤森照信
「旧山川秀峰邸」設計／吉田五十八　48

最新水まわり物語37　虎ノ門ヒルズ　54

地域に生きる会社64　平成建設　60

TOTO出版が25周年を迎えました　62

News File　TOTO News,
Books, Cera Trading News　66

『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます。 www.toto.co.jp

表紙写真／「躯体の窓」外観
写真／傍島利浩　編集制作／中原大久保編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所　印刷／ゼネラルアサヒ

Part
04
Shimada Yo

島田 陽

Part
02
Maeda Keisuke

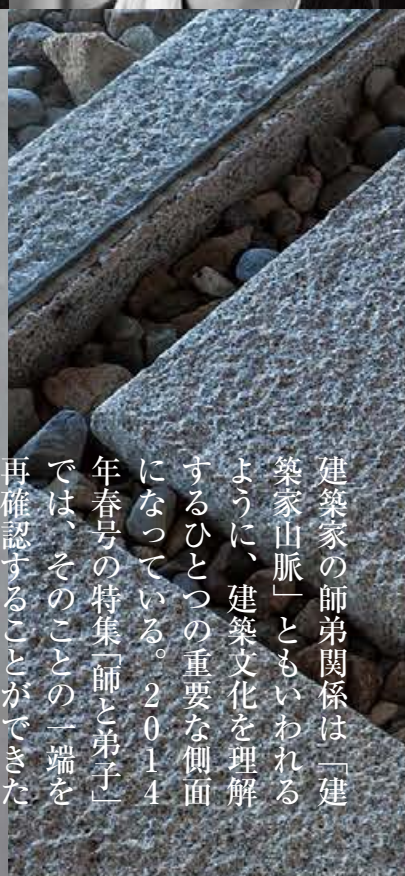
前田圭介

川口通正

Part
05
Kawaguchi Michimasa

森田一弥

Part
03
Morita Kazuya



建築家の師弟関係は「建築家山脈」ともいわれるように、建築文化を理解するひとつの重要な側面になっている。2014年春号の特集「師と弟子」では、そのことの一端を再確認することができたのではないだろうか。しかし一方で、師から学ぶのではなく、独学の誇りをもって建築を始めた人たちもいる。そうした建築家たちは、なぜひとりで歩むことを選んだのか。どのようにして仕事を獲得したのか。そして独学ならではの勤勉さも際立っている。気になることはたくさんあるだろう。今回は独学といっても、設計事務所に勤めていなければ、大学などで建築を学んだ方にも取材した。独学の建築家ならではの声を聞いていく。

これまで増田信吾さんと大坪克亘さんは
塀と窓を設計し、次は基礎だという。
そこには、独学の建築家らしい真摯な姿勢があった。
なぜ部分ばかりを設計するのか。
「躯体の窓」でお話を聞いた。

特集／独学の建築家　その1

インタビュー

増田信吾＋大坪克亘

作品

「躯体の窓」

設計

増田信吾＋大坪克亘

聞き手・まとめ／伏見 唯　写真／傍島利浩

大坪克亘　Otsubo Katsuhisa

全体をゆるがす部分の設計

増田信吾 Masuda Shingo

建物の南面ファサードに、３層分のスチール製建具を張り付けている。隣家の影で暗い南庭が反射光で明るくなる。

素朴な疑問を考えたい

——おふたりはどこで知り合いになったのですか。

増田信吾　最初は、大学受験のための予備校で知り合いました。美大の建築学科を受験するためのコースで、試験に向けて水彩画を描いたり立体物をつくる学校でした。トレーシングペーパーで1mのキャンチレバーをつくるといった、建築学科向けらしく、基本的な構造を理解するような課題も出ました。まわりには恵まれていて、単に課題をこなすだけでなく、十代ながら議論を深められるような仲間が集っていました。大坪とも、そのとき以来の仲です。大学は違っても、予備校仲間の付き合いは続き、お互いに課題を見せ合うようなことはしていました。

——なぜ建築学科を選んだのでしょう。

大坪克亘　芸術系に進みたかったのですが、芸術だけをやりたかったわけではなかったので、いろいろなことを包括している分野として建築を選びました。建築家になりたい、というほど強い意志がはじめからあったわけではありません。

増田　プレゼンしてプロジェクトを実現する力は、なんの仕事をするのにも必要だろう、と思いました。営業をするにもなんにしても。じつはぼくは大学に入る前に一度仕事をしていて、衛星放送の飛び込み営業をやっていたんです(笑)。

——すごい現実的な十代ですね(笑)。結局おふたりは建築家への道を歩んだわけですが、大学卒業時に建設会社や設計事務所へ就職することも考えましたか。

大坪　そのときは考えなかったですね。大学院への進学は考えましたが、2年間でいったい何を研究するのか、まったく想像ができなかったのでやめました。一度建築から離れようとも思いましたし、いわば迷子状態でしたので、準備期間のようなものが必要な気がしていました。

増田　ぼくも同じ考えでした。大学院に行くと今後の指針が決まりすぎると思いました。後から考えると、わからないこと、消化できないことが多すぎて、どこから手をつけてよいのかわからなかったのだと思います。それでぼくらは、風力発電会社でアルバイトをしていました。

大学院で研究したり
大きな建物を設計するより
もっと素朴な疑問を考えたかった。

Masuda Shingo

風力発電会社での仕事

——設計事務所ではなく、風力発電会社ですか。そこではどのような仕事をされていたのでしょう。

増田　会社が市民向けにプレゼンするための模型やジオラマを製作するアルバイトでした。大坪もお金がなかったので誘いました。アルバイトとはいっても、ぼくらはかなり真剣にやっていて、期日内に大きな模型をつくるためには戦略が必要でしたから、スケジュールを逆算してつくり方を工夫するなど、いろいろと検討しながら仕事をしていました。スケジュールがきびしく夜遅くまで作業をすることもありましたから、社長と話をする機会も多かったです。社長はぼくらのことを気に入ってくれていました。そうしたら、なんと東京ビッグサイトでやるような展示会の設営の仕事をくれたのです。

——スケジュール管理までしっかりやるアルバイトは、さぞ心強かったでしょうね。その風力発電会社からの仕事依頼は、その後も続くのでしょうか。

増田　そうですね。設営だけでなく、模型製作のアルバイトも続けていましたから、しばらくは風力発電会社からの仕事が収入源でした。また、SDレビューをとった「風がみえる小さな丘」(08)も、その会社から依頼された仕事です。風車がある日本の景色を見せるための施設です。要は景色を見せる東屋をつくりたいということでしたが、風のとても強いところでしたから、なかなか普通の東屋では意味をなさないと思いました。それで思い切って建物自体も風で揺れて景色全体に溶け込むような仮設のオブジェをつくることを考えました。

塀の設計

——アルバイトのがんばりが、お金だけでなく、建築家としてのキャリアのスタートにも結びついたのですね。建築雑誌にのるのは「ウチミチニワマチ」(09)という塀が最初ですか。

増田　そうです、『新建築 住宅特集』(新建築社、2009年11月号)にのり

「風がみえる小さな丘」

風力発電事業を展開するCEFの豊北ウインドファーム(山口県下関市)に設置された、風車のある景色となじむように、風によって揺れる東屋。

写真提供／増田信吾＋大坪克亘

「ウチミチニワマチ」

増田信吾さんの実家の塀。エキスパンドメタルを織り込み、構造強度を高めると同時に内外の境界を調整している。風通しをよくすることで北側の湿気も抑えられている。

写真提供／増田信吾＋大坪克亘

夕景

スチールサッシと軀体のあいだに300㎜ほどの隙間があり、そこには屋上から８ｍほどのミラーカーテンが垂れ下がっている。軀体のコンクリート壁面は、小叩き塗装剥離のうえ、シーラー仕上げ。

スチールサッシ

ステンレスベアリングの戸車による引き違い。1.5層分のスチールサッシだが、ガラス厚さを３㎜にするなどの軽量化が図られており、それほど開閉に重量は感じない。

Special Feature:
Self-taught
Architects

01

Interview
with
Masuda Shingo+
Otsubo Katsuhisa

ました。出身の武蔵野美術大学の高橋晶子先生と編集者の方との校外ゼミに参加し、後日見にきていただけました。「塀だけか」という反応でしたが、気に入ってくださいました。

――なぜ塀を設計することになったのでしょうか。

増田　「ウチミチニワマチ」は、ぼくの実家の塀なんです。駆け出しですから、両親に何か設計の仕事はないか、と聞いたところ、家を建て替える必要はないけれど、塀は直したい、ということでした。もともとブロック塀と鉄扉があったのですが、鉄の錆びはひどくなっていて、北側なので湿気もたまるようなつくりでしたから、確かに建て替えたほうがよさそうでした。しかし、当然「塀だけか」とは思いました(笑)。

大坪　それまでの風力発電会社の仕事は3人だったのですが、ひとり就職したので、このときからふたりで設計をしはじめました。「ウチミチニワマチ」では、とくに増田は大変でした。設計者だけど半分施主でしたから(笑)。

――「ウチミチニワマチ」では、どのようなことを考えて設計をしたのでしょう。

増田　実際につくったのは塀だけなのですが、家族に話を聞いてみると、部屋の風通しをよくしたいとか、前の道が狭すぎるとか、いくつか住宅全体や町にかかわる与件もありました。よく考えたら、町を変えたいのだったら、住宅1棟を設計しなくても、町と接している塀を設計したほうが早いのではないか、とも思いました。無理に「建築」の枠のなかでではなく、通りすぎているけれどもじつはそこが真意であり、設計すべき対象ではないか、と思ったのです。ぼくらは、住宅からパブリックや都市を論じるのには、どうしても違和感がありました。今から考えると、大学院への進学を躊躇したのも、そのあたりからきているのかもしれません。もっとふつうに人が通りすぎるところを設計したいのです。そういう目線で見ると、そういった普通のもの、たとえば塀はあまり設計されてこなかったと思いますから、そこを突き詰めたほうがよいのではないかと考えました。ほとんど窓だけを設計した「躯体の窓」も結果的に同じ理屈です。

窓の設計

――「躯体の窓」はどのような経緯で依頼がきたのでしょうか。

増田　鉄筋コンクリート造2階建てのアパートを週末住宅、平日はロケーションスタジオとして貸し出すという、複合的なプログラム内容でした。設計段階の紆余曲折のなかで、窓を設計することになりました。

――窓だけ設計する、というのは不思議な話にも思えます。

大坪　内装の仕事の依頼だったのですが、設計と同時にヒアリングを進めていくと、設計の真意は建物と庭の境界にあったため、われわれがそこを設計し、お施主さんが内装をデザインする、協働というかたちになりました。双方にとっての立ち位置を、自然に考えた結果なんです。

増田　「躯体の窓」の場合ははっきりしているのですが、ぼくらが仕事として担うべきことはなんなのか、ということをいつも考えています。ぼくらはアイデアと設計計画でお金をもらっているつもりなので、お施主さんの希望を図面に起こす仕事ではないと思っているんです。アイデアに価値を見出していただきたいと思っています。その場合、撮影スタジオのことはやはりプロに任せるべき領域ですから、ぼくらが特化して設計するべきところは自然に絞られていきました。

大坪　その分、請け負う立ち位置への責任は大きいです。「躯体の窓」でも、窓まわりの標準仕様を集中的に勉強して、アルミサッシやスチールサッシの歴史も勉強したうえで考えています。

設計の対象を絞り
そこを集中的に考えることで
計画が明快になると思います。

Otsubo Katsuhisa

増田　絞れば勉強しやすいです(笑)。ただ最初は、ガラスのはめ方もわからない状態でしたから、一歩一歩慎重に進めました。自分たちがわかるまで勉強したりエスキスを繰り返しているので、教えてくれる師がいない分、間違いなく効率は悪い(笑)。それでも、じっくり考えてつくったおかげで、納得できるものになったのではないかと思っています。

なぜ部分の設計なのか

――塀、窓と続いています。それぞれの事情があったにせよ、こうした部分の仕事が多いのは、おふたりの建築に対する考え方が反映されていると思うのですが。

増田　空間の設計はあまりしないことにしています。いかに空間になっていないか、というのは、ぼくらの重要な指標になっています。気持ちのよ

南側外観(夕景)

南側外観(昼景)

1階

2階

撮影スタジオとして使われている内部。

屋上

屋上まで立ち上がっている窓。屋上で、その裏側を見る。

北側外観

前面道路側の北側外観。鉄筋コンクリート造2階建て。

い空間というのは、もちろんあるとは思うのですが、そのバリエーションを増やしているだけでは、趣味の世界だと思えてしまうのです。ぼく自身がどこにでも住めてしまう人間ということもあるのですが、空間の力をあまり信じていません。では空間でないとするとなんなのか。場所の前提をどうつくるか、ということなのではないかと思います。たとえば、塀や窓です。その自立した前提が空間をゆるがすものになる、くらいが理想なんです。何かものをつくって、その影響で、ある一時だけ空間が現れる、くらいのほうが、人間が自然の状態でいられるのではないかと思います。空間をはじめから設計してしまうことは、かなり大きな意識決定で、ある意味とても不自然で窮屈なのではないかと思います。

大坪　設計するものには、何か目的や機能があると思うのですが、そういう目的はできるだけなくしたほうがよいと思っています。もちろんお施主さんの要望には応えていくのですが、その目的がはっきりとは見えないほうが、ほかのものと干渉しない設計計画ができるのではないか、という考えをもっています。強い目的は、ほかのことの妨げになることもありますから。何かをつくって、また別の問題を生み出していては大変だと思います。できるだけ無駄を避けてうまく全体が自然にまわっていく状態を構築する、という考え方です。増田が言った「自立した前提」というのはそういうものです。

――次は何をつくっているのでしょうか。

増田　家全体はお施主さんが自分で設計し、われわれはおもに基礎を設計しています(「リビングプール」)。

――また部分(笑)。意図的に部分を設計しようとしていませんか。

増田　いえ(笑)。全体としては平屋の改修です。平面や家全体の希望は、お施主さんがはっきりもっていましたので、それでよいだろうと思いました。それよりも問題は、基礎でした。山の風景を気に入って買われた土地なのに、既存の床高からでは軒の関係で山が見えないし、湿気もひどかったのです。それでは本末転倒ですから、基礎を重点的に設計して山を見るためのアイレベルをつくり、湿気の対策をすることにしました。基礎に蓄熱するような仕組みもつくっています。

――しばらく部分のシリーズが続きますね。

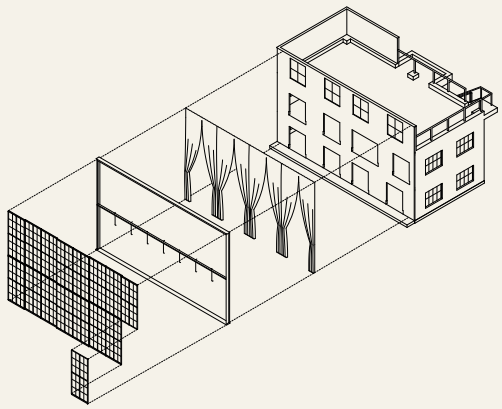
増田　部分ともいえますが、むしろ腑に落ちないことを明確にすることが、可能性を広げ新しい状況を構築するうえで重要であると思っています。

リビングプール(施工中)

平屋の改修。美術家の施主と相談し、増田さんと大坪さんは構造や環境などのさまざまな点で検討が必要とされた「基礎」を中心に担当した。床高さの調整や、湿気の対策などを行っている。

写真提供／増田信吾+大坪克亘

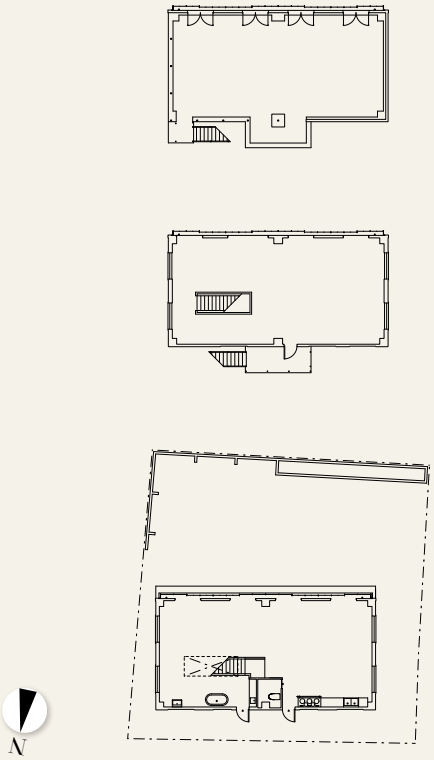
アイソメトリック図



各階平面図

0　2.5　5m

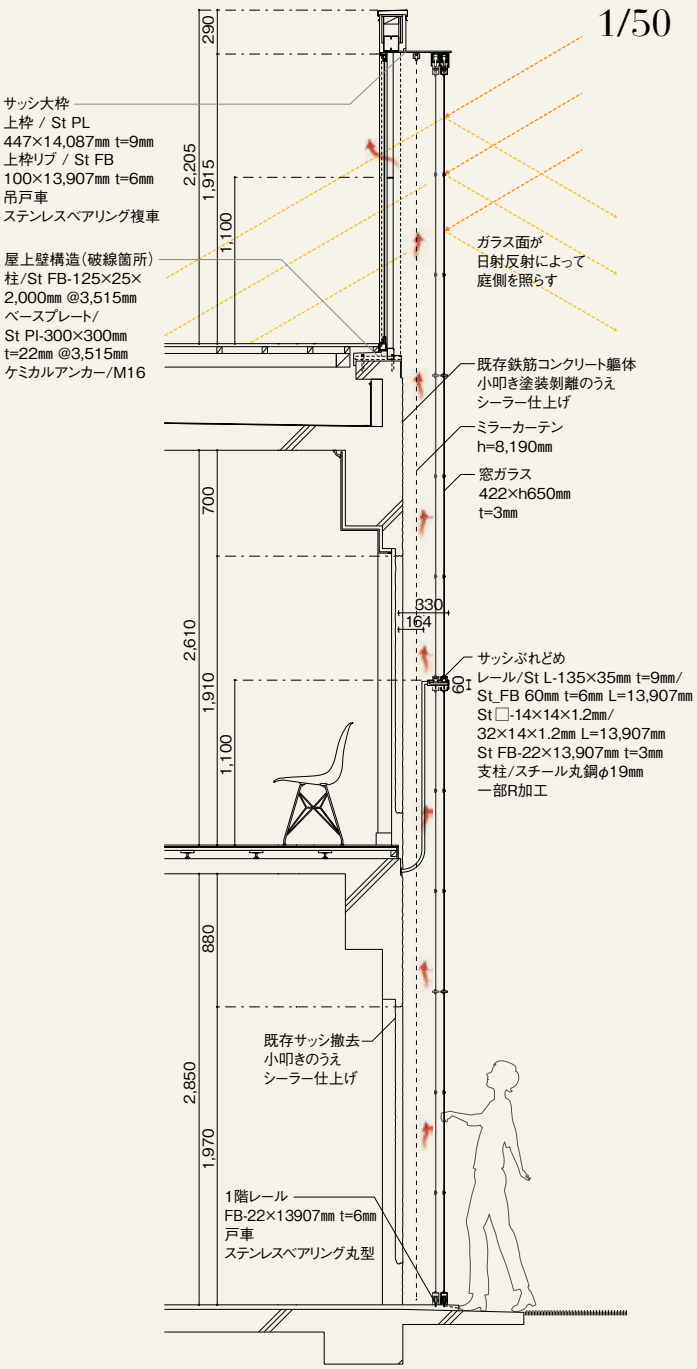
1/500



スチールサッシまわり断面詳細図

0　1　2m

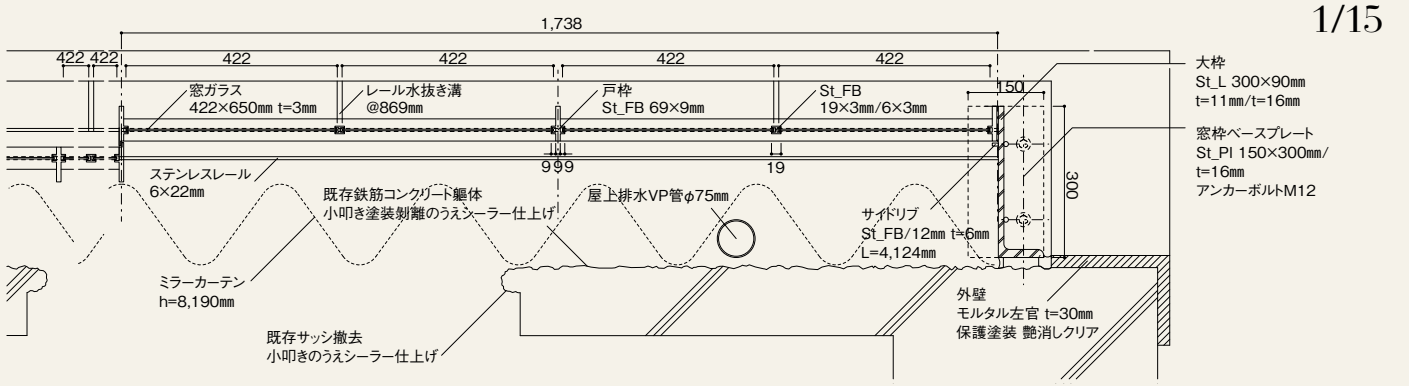
1/50



スチールサッシまわり平面詳細図

0　250mm　500mm

1/15



Special Feature:
Self-taught
Architects

01

Case Study
of
Masuda Shingo+
Otsubo Katsuhisa

「躯体と窓」ではない「躯体の窓」

文／伏見 唯

窓の歴史は、柱間装置の歴史でもある。日本でいえば、柱と柱のあいだが、板壁、土壁によって閉ざされることもあれば、障子や襖などの開閉できる建具が入ることもある。板壁には格子窓が取り付けられたり、土壁には下地窓がうがたれたりすることによって明暗の調整が図られる。仮設的なしつらえを除けば、室内の明暗はほぼ柱間によって行われていた。つまり柱と柱間装置は、いわば並列な関係の建築の根源的な要素であり、柱を「躯体」、柱間装置を「窓」と言い換えれば、「躯体と窓」という状態が一般的だともいえる。その構図をはっきり変えたのはカーテンウォールだが、ほとんどビルに用いられるので開閉しない場合もあり、はたして「窓」と呼んでいいものか。一方、増田信吾さんと大坪克亘さんが設計した建築では、しっかりどころか大胆に1.5階分のガラス戸が開閉する。柱と柱間装置による「躯体と窓」ではなく、窓が軀体に従属しながらも、窓が表層になり、並列ではなく主従や表裏の関係をもった「躯体の窓」である。

「躯体の窓」は鉄筋コンクリート造2階建ての改修である。もともとは集合住宅の住戸だったが、コンバージョン後の用途は撮影スタジオ。内装は施主が決めているため、増田さんと大坪さんがおもに担当したのは南側の開口部だった。室内に光をたくさん取り入れたい、という施主の希望に対し、壁面全体を窓で覆うという案で応えた。窓の数ではなく、大きなガラス面の開放で内外の関係性を調整できるあり方は、モダニズムの芯はずしのような、柱間にとらわれずにありたいとする先人たちとも、想いを同じくしている。

この窓にはほかにも、向かいの家の影によっていつも暗い南庭に、ガラスに反射した光を落とす効果もあり、ガラス面を屋上まで延ばすことによって、壁面とガラスのあいだの暖気を屋上から逃がすドラフト効果も期待しているという。さらに下層の窓の鴨居を2階の手すりとすることで、透過性のあるファサードをきれいに見せるディテールも工夫されている。

増田さん、大坪さんは設計の対象を部分に絞ることで、集中できると言った。確かに意匠から歴史、ディテールまで多くのことが考えられていて、窓だけとはいえ、もはや一点突破とはいえない全体性を帯びている。

サッシと軀体の隙間を見下ろす。この部分を暖気が上るドラフト効果が期待されている。

「躯体の窓」

前面道路側の北側外観。西側の通路を抜けて南庭に至る。

建築概要	
所在地	千葉県船橋市
主要用途	週末住宅+ハウススタジオ
家族構成	個人
設計	増田信吾+大坪克亘
構造設計	坪井宏嗣構造設計事務所（アドバイザー）
構造	鉄筋コンクリート造、鉄骨造（出窓部）
施工	分離発注
階数	地上2階
敷地面積	349.33㎡
建築面積	113.32㎡
延床面積	210.04㎡
設計期間	2012年1月〜2013年3月
工事期間	2013年5月〜2013年12月
おもな外部仕上げ	
屋根	シート防水（屋上）
	ガルバリウム鋼板（屋上壁面）
	スチールプレート t=9㎜（出窓）
外壁	モルタル左官のうえランデックスコートほか
	塗装剥離後ランデックスコート
開口部	製作スチール防錆塗装のうえ
	珪砂入りウレタン塗装仕上げ
	フロートガラス t=3㎜
	スーパーグラスコート仕上げ
おもな内部仕上げ	
南コンクリート壁面	塗装小叩き剥離のうえ
	シーラー塗装仕上げ

Masuda Shingo

増田信吾

ますだ・しんご／1982年東京都生まれ。2007年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。現在、武蔵野美術大学非常勤講師。

Otsubo Katsuhisa

大坪克亘

おおつぼ・かつひさ／1983年埼玉県生まれ。2007年東京藝術大学美術学部建築学科卒業。
おもな作品（いずれも増田信吾と共同設計）=「風がみえる小さな丘」(08、さらに島田雄太を加えた共同設計)、「ウチミチニワマチ」(09)、「躯体の窓」(13)。

現場の経験が後押しに

特集／独学の建築家　その2

インタビュー

前田圭介

作品

「後山山荘」

設計

前田圭介

聞き手・まとめ／伏見 唯　写真／藤塚光政

京都の「聴竹居」で知られている藤井厚二が、地元の福山にて実兄・藤井與一右衛門の別荘として設計した建物の改築。改築設計は同じく福山の建築家・前田圭介さんが担った。廊下にあたる広縁には溝に砂利が敷かれ、外部のようになっている。

part 02

建築家になる前は工務店の現場監督だった前田圭介さん。
そのときの経験をふんだんに生かし、
地元・福山のシンボルとなるような建築をつくっている。
その「後山山荘」にて、
現場監督時代や、独立当初のお話を中心に聞いた。

前田圭介 Maeda Keisuke

入側の床板をはずし、奥の南側サンルームに至る内露地としている。そのほか腰板部分をガラス張りにするなど、さまざまな方法で内外の境を調整する試みがなされている。

建築家になれない挫折感

——前田さんはどういった経緯で建築を志したのですか。

前田圭介　父親の仕事が土木・建築関係だったので、泥くさいイメージをもっていた一方で、子どもながらに、ものづくりのエネルギーをなんとなく感じていました。ただ小さい頃から絵が好きでしたので、土木よりもう少し好きなものがつくれる分野、くらいの気持ちで大学の建築学科に進みました。いわゆる建築家、というものはほとんどイメージできていませんでした。最初の建築学科のイメージは、かっこいい建築家、というよりは建設現場という感じ(笑)。もちろん設計の授業は好きだったのですが、1〜2年生の課題ではまったく評価されませんでした。そんななか、3年生のときに、「海外に行きたい」という単純な理由でルイス・カーンの建築を見学するツアーに参加したのです。そこで「ブリンモア大学女子寮」(1960〜64)や「イエール大学英国美術研究センター」(69〜74)などを見て、心から感動しました。光や素材の扱いに驚いたということもありますが、いわゆる「空間」というものも、初めて感じた気がしました。そのときに「自分も感動するものをつくりたい」と、意識的に建築家を志しました。そうした意識で授業に取り組んだ途端、大学の課題でも1等をとれるようになりました。

——意識の違いというのは、大きいものなのですね。その流れで設計事務所に就職することは考えなかったのですか。

前田　もちろん考えてはいたのですが、卒業の年にたまたま募集が少なかったこともあって、うまくいきませんでした。いろいろとタイミングが悪かったみたいです。当時は有名な建築家のもとで修業しないと建築家にはなれない、という風潮を感じていましたから、勝手にすごく挫折した気分でした。卒業してからは福山の実家に戻って、釣りをしていました(笑)。釣った魚を「晩飯！」とか言って母に渡したりしていたのですが、7月くらいになると大学まで出させてもらいながら職にも就かないのは、さすがに両親に申しわけないという気分になり、どこかに就職することにしました。

敷地は山の中腹にあり、東側に鞆の浦の風景が広がる。

——数カ月で社会復帰できてよかったです(笑)。

前田　ええ(笑)。ただ設計ではないといっても、ものづくりにかかわりたいとは思っていましたから、工務店の現場で働くことにしました。そのときには、建築家の事務所に勤めていないので、何をすればいいのかもわからないし、「建築家にはなれない」という想いにとらわれていました。大学の頃は大好きだった建築雑誌も読まなくなりましたね。

建築の施工現場はコンプレックスなどといった甘えが許されないところでした。

Maeda Keisuke

現場監督の仕事

——現場監督になったときは、建築家へのコンプレックスのようなものがあったのでしょうか。

前田　そうですね。4年生の頃に夢を描いていただけに、落差がありました。ただ実際に現場に入ると、コンプレックスなどといった甘えが許されないきびしい世界でした。中学校の体育館が最初の現場だったのですが、20代の頃に自分の親くらいの年齢の人たちを現場監督として指揮していくわけですから、その難しさに苦しみました。鉄筋屋や左官などのいろいろな職人がいるなか、彼らはそれぞれが1日叩いてなんぼ、という世界で命がけでやっていますから。若くて知識がなくても指示していかなくてはならない難しさを痛感しました。

——なかなか酷な話だと思います。会社では新人でも、現場では監督ですからね。

前田　ええ。しかも現場では、いやな職人とのやりとりは、本当にいやで胃潰瘍にもなったりしました(笑)。童顔なのでなめてかかってくる職人も結構いましたしね。そういう職人に会うと、次に同じ現場になったときのために、共通仕様書や現場での勝手などを理解しながら、その職種のことを徹底的に勉強しました。ただ実際に現場で会って、見返してやろうと話をしても、意外とふつうのやりとりになってしまうんです。

——話が通じるようになったのですね。

立地と外観

写真上／敷地から望む鞆の浦の風景。港町の活気とともに瀬戸内海に点在する島々が印象に残る。写真下／南西側外観。京都の「聴竹居」と同様に日当りの強い南側はサンルームになっており、藤井厚二の設計であることを物語っている。

前田　自分が成長したということもあるのかもしれませんが、本当にいいものをつくりたいとか、無駄な動きをしたくないといった、建築にとって重要なところを共有できたのだと思います。結局、現場監督は指示する仕事でもあるのですが、つくり手とのコミュニケーションが重要な仕事でした。生涯の仕事としてひとつのことに取り組んでいる職人よりも、現場監督はプラスアルファの知識をもっていなくてはならない、と先輩には言われましたが、まずはくわしい職人に教えてもらうのが一番早いと思って、職人の知識を吸収しようとついてまわるようなこともしましたね。

今に引き継がれる経験

――そのときのノウハウや感覚は、設計者になった今でも通底しているのでしょうか。

前田　しています。つくり手とのコミュニケーションの大切さはつねに事務所のスタッフにも話していますし、最近の現場でも、各職種の職長や現場監督に集まってもらう定例会議をすることで、手戻りのないよい仕事のための意見交換を必ずするようにしています。設計者と現場監督が話しただけでは、つくる本人の技量や感覚がわかりませんから。本人がいれば、その場で即決ができます。それと、現場監督の頃の経験という意味では、施工図を描いていたときに雨じまいがうまくいっていない部分を見つけて報告したら、設計者に「適当にやっといて」と言われたことがあったのですが、そういう設計者には絶対になりたくない、という反面教師と出会ったこともありました。現場に来ても、足場にも上がらずに下から見るだけで「よし」と言えてしまう設計者にはなるまい、と心に決めましたよ。

――現場監督として働いていた5年間、職人や設計者とのやりとりのほかは、どのような仕事をされていたのでしょう。

前田　積算もやっていました。とりわけ楽しい仕事ではありませんでしたが、この経験も原価や職人の手間賃の考え方を知る機会でしたし、今も抜群に役立っています。もののつくり方に応じた見積りや、安くする方法を考えるのにつながっています。それと、お施主さん対応。竣工した住宅で雨漏りをすると、竣工したときにはとても喜んでいたお施主さんが、人が変わったようにカンカンに怒っていることがありました。ただ、雨は一度漏ってしまうと、屋根裏を見てもどこが原因かはわからない。延々といたちごっこのように修理を続けなくてはなりません。一時は雨が降るたびに施主からの電話が鳴ることがあり、胃が痛くなりました(笑)。結局、建築は長い時間のなかで考える必要があって、竣工したら終わりではない、ということです。雨漏りを直しきることは難しいので、施主とのコミュニケーションが重要だということを学びました。スピーディな対応をして、気持ちでつながることもひとつの解決策です。今でも事務所では、施主から何か問題があったら迅速に対応することを鉄則にしています。とくに地方でやっていると、うわさはすぐに広まりますから、信頼関係が何より重要なんです。

現場で職人さんと接していると
どんどん建築が好きになり
自分で設計したくなりました。

Maeda Keisuke

再び建築家を志す

――そうした現場経験のなかで、今一度設計者、あるいは建築家になりたいと思ったきっかけはなんだったのでしょう。

前田　職人からの影響です。独学とはいってもぼくの師は職人なんです。この「後山山荘」を手がけた建具屋さんにも現場監督のときに出会いましたが、仕事の内容をとことん突きつめて、後々のために手間を惜しまない姿勢に圧倒されました。そういった職人たちを見ていたら、建築がまた好きになっていったのです。どうせ埋めてしまう地中梁を見ていたときも、「美しいな」とかデザインや空間のことも現場で考えるようになってきて、結局また建築雑誌も読むようになっていったんです。ちょうど一級建築士をとった頃に、どこかの建築家のところに転職しようか、という想いがまた芽生えていきました。

――建築が好き、ということなら、そのまま現場監督として建築に携わる道もあったかと思いますが。

前田　他人が描いた図面で仕事をしてもこんなに楽しいのだから、自分が描いた図面で建築をつくったら、もっと楽しくなるのではないか、と思いました。他人の設計の施工図を描いているとき、こうしたらもっと気持ちのよい空間になるのに、などと感じてしまい、現場監督をしているときにも空間のことを考えるようになっていましたから。また、施工図を描ける

「内海の家」

瀬戸内の島にある内海町の住宅。前田圭介さんの昔の事務所の近くにあり、最初の設計の仕事である。風土になじむ瓦葺きの切妻屋根。
写真提供／UID

し積算ができるから、設計図も描けると思い、設計事務所に勤めていないとはいえ、自分でできると考えました。すでに結婚もして、子どもも生まれるところでしたから、かなり悩みましたが、妻が後押ししてくれました。ちょうど「内海の家」（2003）の依頼もきていましたから、28歳のときに独立しました。

最初の仕事「内海の家」

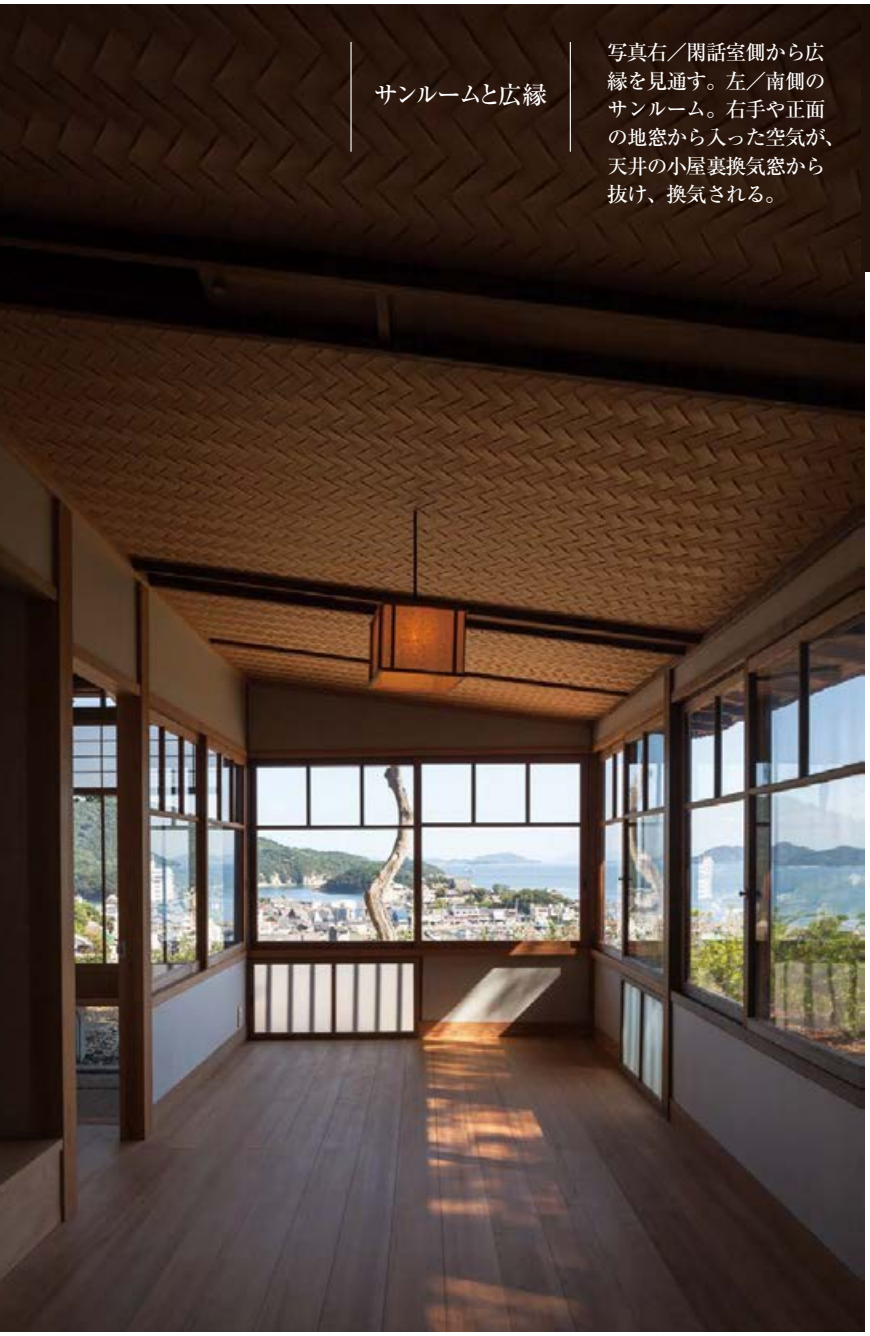
——「内海の家」はどういった経緯で依頼がきたのでしょうか。

前田　祖母の家が、福山市内から1時間くらいの内海町というところにあったので、そこにしばらく住んでいたのですが、家の前に立てた営業の看板を見て、内海町に家を建てたいという人が訪ねてきたのです。後々聞くと、建てることを決心していたわけではなかったのですが、こちらのプレゼンの熱がすごかったので、それに押されて決意した、と言っていました。確かに、必死でしたからね（笑）。

——「内海の家」は切妻の瓦屋根。「アトリエ・ビスクドール」（09）などの今のスタイルとはだいぶ異なりますね。

前田　瓦は避けたいという気持ちも少しはあったのですが、小さい頃から祖母の家にいくとよく遊んでいた場所で土地柄もよく知っていましたから、現代的な建築はふさわしくない、ということを肌で感じました。ただ、せっかく瓦を使うならしっかりしたものにしたいと思い、産地や種類・特性などを調べて、淡路のいぶし瓦を使うことにしました。

——土地柄上、「内海の家」は少し伝統的ですが、当時から現代的な建築を志向していたということでしょうか。



サンルームと広縁

写真右／閑話室側から広縁を見通す。左／南側のサンルーム。右手や正面の地窓から入った空気が、天井の小屋裏換気窓から抜け、換気される。

居間と前室

写真右下／玄関の取り次ぎにあたる前室。左下／居間から内露地越しに外を見る。

「アトリエ・ビスクドール」

大阪府箕面市の住宅街に立つアトリエ兼住宅。鉄骨パネルが3重の帯状に配され、互いがバランスを保ちながら浮遊している。プライバシーを確保しながら内外がつながった空間をつくり出している。

写真提供／UID

前田　「現代的」とはいっても、現場監督をしているときから、近所や京都・奈良の古建築を見てまわり、光や素材などが自然と寄りそうあり方が本当によいな、と思っていましたので、古い日本建築がもっているエッセンスを吸収した現代建築のあり方を考えています。今でもひとつのテーマにしている半外部のような空間も、たとえば光浄院客殿の広縁を連想しながら考えていますし、古建築の気持ちよさはいつも意識しています。それと日本建築と通じる植物は、育った環境のせいか、昔から関心をもってきました。「内海の家」では、グッドデザイン賞（03年度）をとることができたのですが、数十種類の植物を記載した外構図が評価されたそうです。

福山での営業活動

――独立当初は経営的にはどのような状況でしたか。

前田　内海町だと市内までの移動がたいへんなので、福山の中心街のほうに出ました。築40年のお化けが出そうな古いビルの一室を借りていました。20坪の部屋だったのですが、半分に仕切らせてもらって、家賃を半分にしてくれ、と交渉しました。現場上がりですから、その仕切りもこちらでつくりました（笑）。そこからは、経費と貯蓄との関係で、10カ月くらいが勝負でした。必死に動くしかありませんでした。まず「内海の家」がグッドデザイン賞をとれていたので、「チャンスはここしかない」と思い、地元の各新聞社にファクスをしました。そうしたら、なんと中国新聞と朝日新聞が見にきてくれました。本当に来てくれた、と思ってうれしかったですね。それと、グッドデザイン賞をとったことで『新しい住まいの設計』（扶桑社、2004年5月号）に掲載されたのですが、『新しい住まいの設計』のポップ（店頭の広告）を勝手に自分でつくって、岡山市内の丸善をはじめ、三原市内まですべての本屋に置かせてもらいました。

――地方だとかなりの効果がありそうですね。

前田　当時としては仕事もなかったし、効果がある、と思うしかなかったですね。ただ福山市周辺の備後地域では啓文社という本屋が有名なのですが、社内でうわさが広まっていて、どの支店に行っても、「あー、聞いているよ」と言って快く置かせてくれるようになりましたから、少なくとも本屋のあいだでは名前が売れました（笑）。結局、この戦略が功を奏したかはわからないのですが、『新しい住まいの設計』を読んだ、ということで新たな依頼をいただきました。「ホロコースト記念館」（07）も館長が地元新聞を見て、関心をもってくださったのが始まりです。地元のつながりがやはり大きかったです。みなさん、地元の建築家ということで興味を示してくださいました。この「後山山荘」のお施主さんも、福山の建築家ということで「内海の家」を見たうえで、依頼してくださいました。

チャンスを逃さないように
必死になって動いていたら
少しずつ仕事がくるようになりました。

Maeda Keisuke

福山と職人への想いがつまった建築

――この「後山山荘」は、地元福山の建築ですし、現場監督のときに出会った職人さんたちとつくっていますから、前田さんらしい建築ですね。

前田　ここでは、現場監督時代からの縁がある瓦屋さん、表具師さん、建具屋さんなどと一緒に仕事をしました。また「内海の家」と同様に地元の風土をよく考えてつくった建築です。ぼくは、地元・福山で活動しているということ、また現場監督の頃の経験、その両方を大切にしていきたいと思っています。「後山山荘」は、積算の経験を踏まえても、予算的にはかなり苦しかったのですが、地元の大和建設さんをはじめ、かかわった多くの人たちが、最後は福山の文化財を残そうという想いでつくりあげました。建築にとって金銭は不可欠だけれども、もちろん本質は金銭ではないのですから、こういう建築が残せないようでは未来はない、という想いを共有していました。

――コミュニケーションの大切さを痛感している前田さんだからこそ、そうした想いをつなぐことができたのではないでしょうか。

前田　職人の心意気、途絶えていきそうな技能、あるいは福山の風土などの大切なものを、お施主さんや世の中に伝えていくのは、建築家のひとつの役割だと思っています。

中／既存の天井材を洗って再利用した竿縁天井。左／既存の皮付き葦とスギ板からなる欄間を再生した。

写真右／外側から見たサンルームの地窓。５本の細い窓格子の奥に曇りガラスの引き違い戸がある。

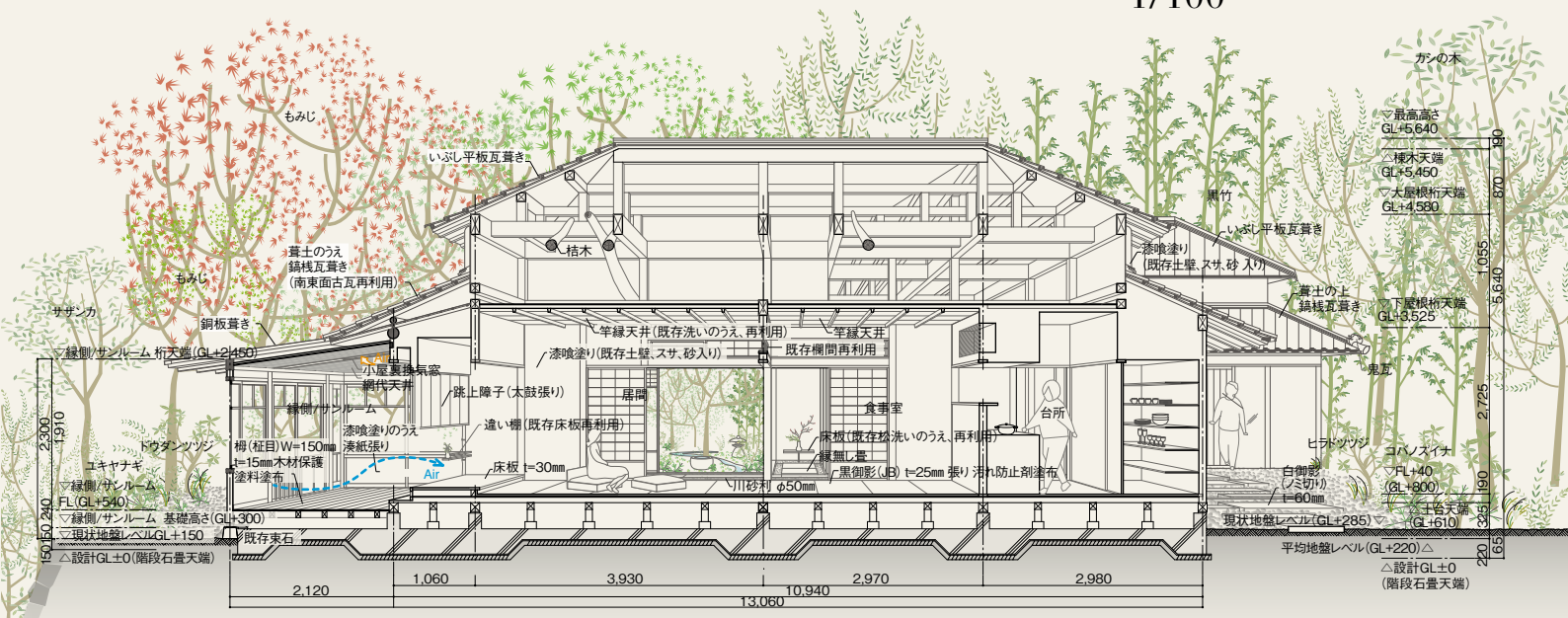
平面図

1/200

桁行断面図

0 1 2m

1/100



梁行断面図

0 1 2m

1/300

前田圭介

Maeda Keisuke

まえだ・けいすけ／1974年広島県福山市生まれ。98年国士舘大学工学部建築学科卒業。工務店での現場監督経験を経て、2003年UID設立。現在、広島工業大学、福山市立大学、神戸芸術工科大学、名古屋工業大学非常勤講師。おもな作品＝「森×hako」(09)、「アトリエ・ビスクドール」(09)、「群峰の森」(14)

「後山山荘」

建築概要	
所在地	広島県福山市鞆の浦
主要用途	別邸+多目的
家族構成	2人ほか
設計	前田圭介／UID
構造設計	田中輝明建築研究所
構造	木造在来軸組工法
施工	大和建設
階数	地上1階
敷地面積	4,654.33㎡
建築面積	139.53㎡
延床面積	139.53㎡
設計期間	2009年12月～2012年8月
工事期間	2012年9月～2013年9月
おもな外部仕上げ	
屋根	いぶし平板瓦葺き(大屋根)
	木質下葺材、葺土のうえに鎬桟瓦葺き(下屋根)
	※南東面は古瓦再利用
	銅板葺き(サンルーム)
外壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
開口部	既存木製建具、木製建具、襖、障子、アルミサッシ
外構	砂利敷き、白御影敷き(ノミ切り) t=60㎜
おもな内部仕上げ	
前室・前庭	
床	畳(綿麻表)敷き、砂利敷き
	白御影敷き(ノミ切り) t=60㎜
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	スギ矢羽網代天井
広縁	
床	縁無し畳 t=55㎜、砂利敷き(溝部分)
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	スギ矢羽網代天井、海布丸太現し
居間	
床	黒御影張り(JB) t=25㎜ 汚れ防止剤塗布
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	竿縁天井(既存洗いのうえ、再利用)
食事室	
床	黒御影張り(JB) t=25㎜ 汚れ防止剤塗布
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	竿縁天井(竿縁:杉、天井板:杉中目板)
台所	
床	黒御影張り(JB) t=25㎜ 汚れ防止剤塗布
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	スギ矢羽網代天井
洗面室	
床	縁無し畳 t=55㎜
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	スギ矢羽網代天井
浴室	
床	黒御影張り(JB) t=25㎜ 汚れ防止剤塗布
壁・天井	檜板張り w=60㎜ t=15㎜ 木材保護塗料塗布
閑話室	
床	栂張り(柾目) w=150㎜ t=15㎜
	木材保護塗料塗布
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	スギ矢羽網代天井
内露地／サンルーム	
床	白御影敷き(ノミ切り) t=60㎜、砂利敷き(溝部)
壁	漆喰塗り(既存土壁再利用)
天井	海布丸太現し(既存洗いのうえ、再利用)
縁側／サンルーム	
床	栂張り(柾目) w=150㎜ t=15㎜
	木材保護塗料塗布
壁	漆喰塗りのうえ、湊紙張り
天井	スギ矢羽網代天井、小屋裏換気窓
	(既存洗いのうえ、再利用)

Special Feature: Self-taught Architects

02

Case Study of Maeda Keisuke

藤井厚二のサンルームが守る渾身の現代建築

文／伏見 唯

広島県の東端に位置する福山市は、京都帝国大学(現・京都大学)工学部建築学科を創立した武田五一をはじめ、田辺淳吉や藤井厚二などの著名な建築家たちのゆかりの地である。なかでも藤井は、「くろがねや」という福山で清酒・保命酒の醸造業を営む豪商の家の次男であり、とくに福山と地縁の深い人物であった。周知のとおり、藤井厚二は京都・大山崎の自邸「聴竹居」(1928)を建てた人物であり、気候や風土に適した住宅を追い求めたことから環境工学の先駆者ともいわれている。その藤井が建設に携わったと思われる建築が「後山山荘」。藤井の兄であり、くろがねや当主・藤井與一右衛門の別荘である。修復と改築は、やはり福山の建築家・前田圭介さんが行った。

前田さんが改築を始めたとき、この住宅はほとんど倒壊に近い状態だったという。しかしそのような状態でも、はっきりと藤井厚二が携わったことを物語る南側サンルームは倒壊を免れて残っていた。大山崎の「聴竹居」は通気や採光などの自然のエネルギーを生かした、まさに建築環境工学の先駆的な発想が数多く盛り込まれているが、そのうちの大きな特徴のひとつが、光を全面に受ける南側にサンルーム(縁側)を設けているところである。夏は居室への直射を和らげ、冬は暖かいサンルームになる。客の多い財界の巨星(藤井與一右衛門)の別荘であるから、全体としては自邸のようにモダンデザインで覆うことができなかったとしても、環境への志向はしっかりと果たされたのだ。そんな藤井を象徴するような部屋が倒壊を免れたとは、まるで藤井建築だと気づいてもらうのを待っていたかのようだ。

独特の感性で内外の関係を調整し、半外部の空間を生み出してきた前田さんは、全体的には伝統的な造りのこの住宅においても、半外部を鋭く組み込んでいる。数寄屋の露地のような空間を、室内の中廊下や縁側部分に生み出しているのである。如庵の躙口前の土間や、「惜櫟荘」(設計:吉田五十八、41)の四半敷きの中廊下を思い出しながら、あらためて外部が内部へ貫入することで生まれる建築の空間性を確認した。藤井のサンルームが守る背後の建築を、渾身の現代建築とすることも、藤井厚二に対する前田さんの礼儀だったのであろう。

職人の目を通したものづくり

大学院修了後、左官の道を歩んだ森田一弥さん。
文化財の土壁修理も担い、
数々の土や下地を見たうえで設計者になった。
その左官のノウハウを各所に生かした「御所西の町家」にて、
左官の目を通した建築家の考えを聞いた。

森田一弥　Morita Kazuya

特集／独学の建築家　その3

インタビュー

森田一弥

作品

「御所西の町家」

設計（改修）

森田一弥

聞き手・まとめ／豊田正弘　写真／川辺明伸

通り土間のある京町家の改修。土間や土壁が、複数の左官職人の手によって、さまざまな方法や工程で仕上げられている。土間の担当は久住誠さん。

現場を目指す

——学生時代はよく旅をされ、修士課程でも1年間の旅に出たとうかがいました。そこから得られたのはどんなことですか。

森田一弥　学校で学ぶ建築の歴史はヨーロッパが中心ですが、その周辺で何が起こっているのかを知りたいと思っていました。1年間の旅は西ヨーロッパ以外のユーラシアの国々をめぐるもので、原広司さんの『集落への旅』(岩波書店)やバーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』(鹿島出版会)を持って、本にのった集落を片っ端から見に行きました。その旅で、一生忘れられないほどの個性のある集落や建築をたくさん見ることができました。

当時はポストモダンの時代で建築家はいろいろな形をつくっていましたが、その根拠がよくわかりませんでした。でも集落の旅に行くと、形と場所の切実な関係が五感を通してはっきりと感じられたのです。

——卒業後に職人を目指されたのはなぜでしょうか。

森田　学生時代、布野修司先生のもとでチベットのラサのフィールドワークで修士論文を書き、形と文化・宗教・気候との関係を考察しました。一方で形と素材・工法との関係についてはまだよくわかりませんでした。そこでものをつくる現場を目指したんです。見るだけでなく、つくる立場の人間として建築を理解してみようと。

ただ、左官屋に行ったのはほんとに偶然です。文化財の仕事が多くて、土をこね、藁を混ぜてという作業をやりました。

当時、将来は設計をするつもりがあったのかどうかよく覚えていません。ただ実際に行ってみると、素材と肉体で格闘するような毎日がすごくおもしろかった。

京都の文化財の現場で土をこね、藁を混ぜ、土壁を塗る左官職人になりました。

Morita Kazuya

町家の改修から学ぶ

——では、独立して設計を始めたのは、どういう経緯だったのですか。

森田　4年、5年と修業をするうち、文化財の現場では左官技術が本来もっている技術の可能性が十分生かされていないことを痛感しました。たとえば鎌倉時代と江戸時代の建物を比較してみると、技術はどんどん変化していることがわかる。でも文化財は昔どおりに復元するのが仕事ですから、そこにとどまることを強いられる。左官で学んだことを現代建築の設計の分野で生かしたいと思うようになりました。

——その場合、設計事務所に勤めて、設計を勉強してから独立を考えるのが一般的だと思うのですが……。

森田　設計をテクニックとして学んでしまうことへの恐れもあり、それは考えませんでした。学生のときに布野先生に教わろうと思ったのも、設計について学ぶより先に、すでに世界に存在している建築についてしっかり学びたいと思ったからです。

それと独立して最初の仕事が「Ｍａｙｕ」(２０００)という町家改修でした。文化財の現場をずっと見ていたので、木造建築の修復には自信がありました。ですから、図面の描き方も、見積りのとり方も、わからないことだらけでしたが、その仕事で少しずつ設計の実務を覚えていくことができました。

——独立して設計者になられた後も、左官として自作に参加されているようですが……。

森田　今は基本的に職人さんにお願いしています。目指すものがはっきり伝えられるときは、毎日仕事をしている人のほうが効率がいいし、上手です。ただ、誰もやっていないこととか自分でもよくわからないことをやるときは、人にお願いできない(笑)。自分でやれば、その場ですぐに対応できますしね。

技術の根源へ

——根源的なものに興味があるそうですね。

森田　技術が生まれてきたところを見てみたいのです。たとえば京都の聚楽壁が生まれる前はどんな土壁だったのか。どんな理由で生まれたのか。それを知らないことには、土壁の未来について考えることはできないという気がします。

「Ｍａｙｕ」

森田一弥さんが独立して最初に手がけた築約70年の町家の改修。店舗として使われている。

写真／©杉野 圭

Special Feature: Self-taught Architects

03

Interview with Morita Kazuya

茶室

２階の三畳間。土壁は丹波黄土荒壁。隅の部分に亀裂を生じさせない仕様を職人に説明するのが難しく、森田さんが自分で土壁を塗った。右手の掛け障子の奥にはトップライトがある。

奥庭（土間）

玄関からそのまま土間がつながる奥庭。さらに奥には外庭がある。奥の壁面は大津壁の部分や、上塗りを剝がし中塗りだけにした部分など、左官のさまざまな工程が表され時系列を横断したデザインになっている。

左官修行の最初に、土となじみをよくするために藁を叩いてやわらかくする作業をしました。そのとき、チベットのおばちゃんが道端でやっていたのはこれだったんだなあと感激したんです。京都の伝統と世界とは根っこのところでつながっている。

――モロッコのタデラクトという漆喰も根源的な技術につながっていると書かれています。

森田　はい。自分が興味をもっている技術のひとつに「漆喰磨き」があります。モロッコに行ったとき、道端の職人さんが壺に塗っていた漆喰がピカピカに光っていた。しかも彼らは鏝（こて）ではなく丸みのある石を使って漆喰を磨いていたのです。これを見て、左官鏝の起源は石なのではないかと思い至りました。日本の土壁技術は平らな壁を塗ることに特化していて曲面を仕上げるのは苦手ですが、石の鏝ならどんな曲面にも対応できます。根源的あるいは原始的な技術を見ると、ものの原理がよく分かります。

ここ「御所西の町家」の土間では、コンクリートでも石灰を混ぜた伝統的な三和土でもなく、土を固めただけの最も原始的な土間工法を採用しました。

――カタラン・ボールトという技術についても調べられていますね。

森田　日本の左官技術が壁のテクスチャー表現だけにとどまるのでなく、それ自身が構造として自立できないかと考えたのがきっかけです。

「Concrete-pod」（２００５）は発泡スチロールの型枠にガラス繊維入りのセメントを塗ってつくった厚みわずか15㎜のドームです。その後ドームの工法について調べていくと、ドロドロの左官材料に形を与えるのは型枠だということに思い至り、まずは型枠の歴史に興味をもったのです。

ローマ帝国の建築では立派な木製の型枠が使われていますが、中東にいくと型枠自体を使わずに独特の方法でレンガを積んでドームをつくる技術が生まれてくる。それがスペインに伝わったすえに生まれたのが、薄いレンガを型枠を用いずに石膏で固めていくカタラン・ボールトという技術で、ガウディの建築もこれでつくられています。今はこの工法をどうやって現代に生かすか、ということについていろいろな試みをしています。

「御所西の町家」の時間性

――この「御所西の町家」を拝見していると、建築のもつ時間について考えさせられます。

森田　スペインに留学した2年間で、古い建物を改修して使い続けることの意味、そして建築における時間の表現について考えるようになりました。たとえば荒壁から上塗りまで何層にも重なるレイヤーをもつ日本の土壁について、これまでテクスチャーの違う層としか認識していなかったのですが、これは水平方向に積み重ねられた「時間」といえるのではないかと。

この町家の土間では大津壁で仕上げられた既存の古い壁と新しく塗った荒壁が対面しています。この荒壁はものとしては新しいけれど工法としては原始的な壁です。そのせいか、一見するとどちらが古い壁なのか区別がつかない。荒壁はある意味ではこの町家よりもずっと古い歴史をもっているわけで、テクスチャーではなくその深層に潜む時間を表現するために、あえてそのままの状態で見せているのです。

――何か民家のようですね。

森田　ええ、町家というよりどこかの納屋のような感じになりました。ヨーロッパにも南米にもありそうだし、ネパールの民家にも見えます（笑）。

既存の技術というより
その技術が生まれた理由、
ものの根源に興味があります。

Morita Kazuya

設計と職人を同時に

――独学で建築を志す人は、最初は仕事を獲得するのが大変だろうと想像します。どうやって仕事を得たのか、経営的な軌道にのせるための工夫などをおうかがいします。

森田　最初の5年間は新築の仕事がなくて、リノベーションやインテリアの仕事をしていました。ぼくは現場でも働けたので、左官工事を自分で請け負ったりしていました。1年の半分くらいは職人の仕事をしていたし、いざとなれば出稼ぎに行くぞ（笑）という気分です。またその分、現場に長くいられるので、大工さんとの打ち合わせの時間がとれるのもありがたかった。町家修復の現場はつねに図面と違ってくるので、それに対応する必要がありますから。

左官で文化財の修復をしてきたのは、町家修復の仕事を得るうえではメリットがあったかもしれません。「金閣寺も直しました」という信用が（笑）。それに文化財の仕事は痛んだ部分を解体して修復する作業ですから、長持

「Concrete-pod」

「コンクリートアートミュージアム」のために制作された超薄型コンクリートによる小さなドーム。左官材料だけで自立した構造を実現している。

写真／移岡一郎

ちしないディテールがとてもよくわかる。納まりの勉強になりました。

師は建築の先にいる

——建築教育について、「建築家」を育てるより「建築の職人」を育てるべきだ、と森田さんがブログで書かれていたのに感心しました。左官はどんな状況でも平らになめらかに壁を塗ることをまず修業する。建築家も同様に、最低限の条件を満たすことを覚えさせる教育が大事ではないかと。

森田　職人も技術が基本だし、設計も同じだと思います。最低限押さえるべき基本があって、まずそれを身につける教育がなされるべきです。その基本が身について初めて、根本の前提を疑うことが可能になる。ぼくも平らな壁が塗れるようになって、日本の左官技術の長所と短所、そして今後の可能性に意識的になることができた。

——森田さんの場合、設計の師はいないわけですね。

森田　師匠がいる人は、師の言動にじかに接するなかで、さまざまなことを学びとるのだと思います。ぼくは集落を見ていた頃から、建築を通じてそれをつくった人と対話しているつもりですが、そうした距離感が好きなのかもしれません。待庵を通して利休の考えを探り、ガウディの作品やカタラン・ボールトという技術を通して彼の思想に想いをはせるのです。

——それは、京都郊外の静原という山深い地にアトリエがあることとも関係しますか。

森田　京都は人口150万人の都市ですが、独特の美意識や歴史の重さがあって、それにとらわれてしまうのがいやなのです。そことはあえて距離をとりたいと思っていました。静原は500人、150軒くらいの集落なので、とても居心地がいい。一方で左官技術は、マイノリティだけどインターナショナルな技術です。必要とあらば、ここからいろいろなところへ出かけていく、渡り職人のような建築家像を目指しています。

走り庭（玄関）

玄関から奥庭につながる走り庭。右手には表の間と次の間が見える。

Special Feature: Self-taught Architects

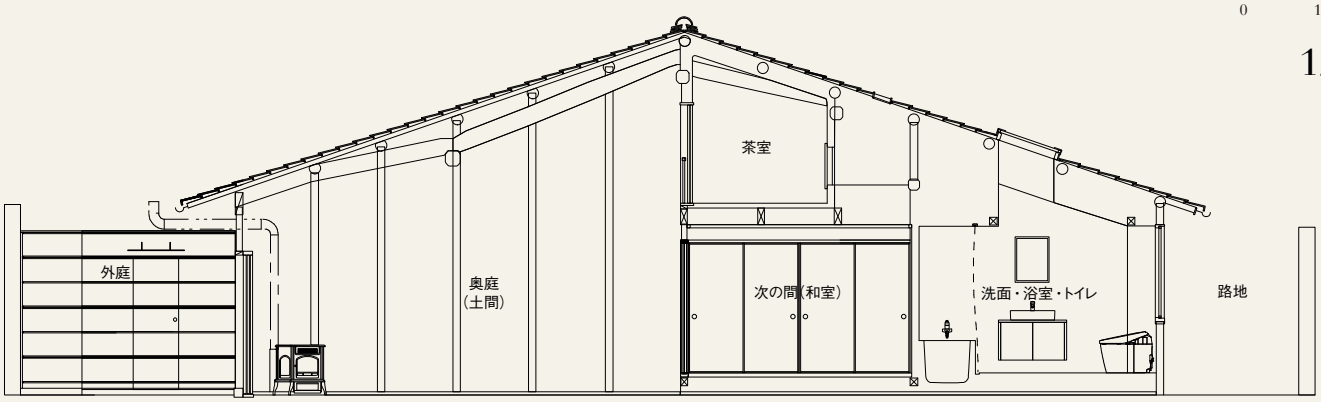
03

Interview with Morita Kazuya

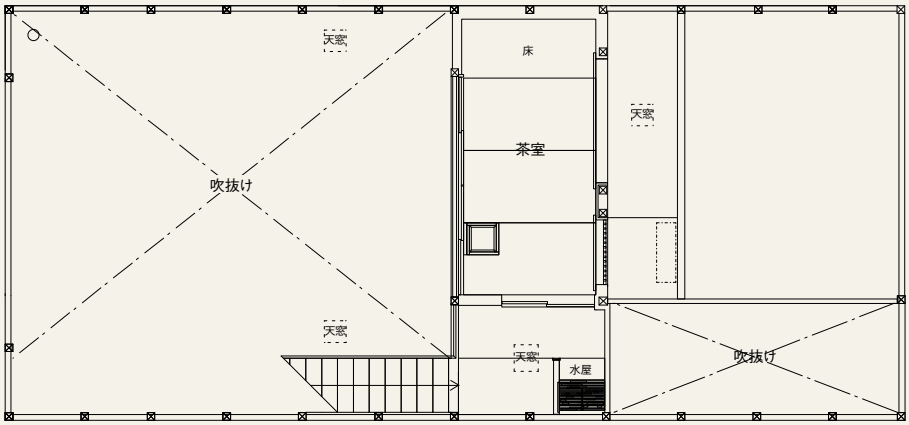
アプローチ

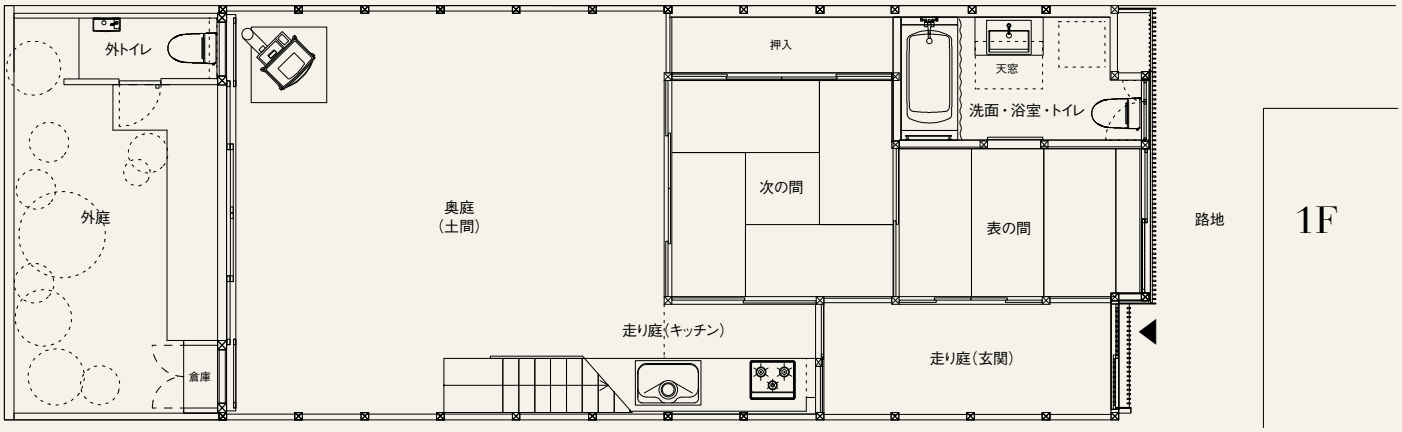
写真中／建物正面。細い路地を抜けた先にある旗竿敷地に立つ。ファサード全体を縦格子で覆っている。下／アプローチの細い路地から奥に建物正面を見る。

断面図



平面図





もりた・かずや／1971年愛知県生まれ。94年京都大学工学部建築学科卒業。97年同大学大学院修士課程修了。97〜2001年京都「しっくい浅原」にて左官職人として修業。00年森田一弥建築設計事務所設立。07〜08年ポーラ美術振興財団新進芸術家海外研修員（バルセロナ）。11〜12年文化庁新進芸術家海外研修員（バルセロナ）。現在、滋賀県立大学非常勤講師。おもな作品＝「Mayu」(00)、「Concrete-pod」(05)、「Shelf-pod」(07)。

森田一弥

Morita Kazuya

「御所西の町家」（改修）

建築概要	
所在地	京都市上京区
主要用途	専用住宅
家族構成	1人
設計	森田一弥／
	森田一弥建築設計事務所
構造	木造
施工	エクセル住宅建設
階数	地上2階
敷地面積	79.96㎡
建築面積	64.64㎡
延床面積	81.48㎡
設計期間	2012年11月～2013年5月
工事期間	2013年5月～2013年11月
おもな外部仕上げ	
屋根	瓦屋根
外壁	木製格子、
	大亀谷土大直し塗り、スギ皮、波板鋼板
開口部	木製建具、既存天窓瓦、
	一部天窓アルミサッシ
外構	スギ皮、たたき風モルタル洗い出し
おもな内部仕上げ	
走り庭（玄関）	
床	淡路土たたき
壁	既存土壁補修、
	既存上塗りを剝がしたまま、
	大亀谷土大直し塗り
天井	ラワンベニヤ バトン拭き取り塗装
表の間	
床	本畳 t=55㎜
壁	丹波黄土切り返し塗り
天井	スギ板張り t=15㎜
次の間	
床	本畳 t=55㎜
壁	丹波黄土切り返し塗り、鏡張り
天井	スギ板張り t=12㎜
走り庭（キッチン）	
床	淡路土たたき
壁	モザイクタイル、
	大亀谷土大直し塗り、一部既存土壁
天井	スギ板張り t=15㎜
奥庭	
床	淡路土たたき
壁	既存土壁補修、大亀谷土荒壁
天井	ラワンベニヤ バトン拭き取り塗装
外トイレ	
床	三和土風モルタル洗い出し
壁	スギ皮張り 女竹押さえ
天井	パラリ漆喰
茶室	
床	本畳 t=55㎜
壁・天井	丹波黄土荒壁
水屋	
床	本畳 t=55㎜
壁	大亀谷土大直し塗り、既存土壁
天井	ラワンベニヤ バトン拭き取り塗装
洗面・浴室・トイレ	
床	タイル
壁	不燃化粧板、白漆喰
天井	珪酸カルシウム板 VP

100年の時を超えていく空間

文／豊田正弘

広々とした土間

「現地での待ち合わせは無理」という建築家の言葉どおり、細い路地の導かれた先にある築100年の連棟町家。そのひとつを改修した住宅にうかがう。ファサードを覆う縦格子の脇、玄関の引き戸を開けると、町家特有の暗さに目が慣れるにつれ、走り庭に続く奥庭の土間空間、さらに外庭という構成が見えてきた。文学者のセカンドハウスであり、ゲストのための大きな土間が特徴だ。

土間の椅子に腰かけると、その空間はおだやかで心地よい空気に満たされていた。理由のひとつは、形が主張してこないこと。そして同時に、素材感が前面に出しゃばることもない。あらためて眺めてみる。

未来への時間を見すえて

まずは土壁。たとえば新築した土壁は、断熱材を入れて竹小舞を編んだうえ、荒壁という下地塗りの段階で工程を止めたため、全体にひび割れが入っている。そのほか、既存の大津壁を残したところ、その上塗りを剝がして柱際だけを補修したところなど、さまざまな表情をもつ。

そして土間のやわらかさは靴底を通しても体感できる。コンクリートを打たず、土を固めただけの原始的な工法だ。さらに木部も、黒々とした既存部分に対し、新しい部分は塗装をしていない。

そんな一見バラバラなものたちが、違和感なく共存している。それは森田さんが左官職の修行を経て独学で培ってきた、ものへの繊細な眼差しがもたらした成果ではないだろうか。

ここでは材料や施工時期のほか、工程や工法や平面形式などさまざまな新旧の要素が渾然一体となっている。そこに内蔵された時間は、築年数よりもはるかに大きなスパンを獲得しているのだ。

改修が終了した現在は、大きな時の流れの一断面にすぎない。数年後そして数十年後、ここに人々の新たな交流が生まれ、空間全体が深くなじんでいく姿が想像された。

淡路土たたき

既存剝がし壁

荒壁

既存の大津壁

Special Feature: Self-taught Architects

03

Case Study of Morita Kazuya

特集／独学の建築家　その4

インタビュー

島田陽

聞き手・まとめ／大山直美　写真／川辺明伸

作品

「タトハウス・北野町の住居2」

設計

島田陽

島田陽さんは大学院修了後に
不思議と仕事が連続し、
いつのまにか独立している状態だったという。
連続する仕事のなかでひとつの集大成ともいえる、
「タトハウス・北野町の住居2」にて、
島田さんがどのように独学の道を
歩んだのかを聞いた。

施主とさがす建築へ

２棟のボリュームを階段室がつなぐ構成。左手の東棟は下見板風にフレキシブルボードを張り、右手の西棟はリシン吹付けで仕上げ、新しい建物と古い建物が混在する北野町の周辺環境に合わせて設計された。島田陽さんの実家および事務所であり、これまでの設計活動のなかでの、ひとつの集大成。

大学の課題や文化祭にて

――いつ頃から建築家になろうと思われましたか。

島田陽　最初から建築のほうへ行く気はなかったのですが、なんとなく芸術系でも行こうかと思って入った大学がたまたま1年の前期は専攻に分かれてなくて、全員がデザイン、日本画、彫刻など同じ授業を受けた後、夏休みに共同制作の課題が出るのです。それで、「どうも三角形を集めるとドームができるらしい」というわさを頼りに(笑)、段ボールのシェルターをつくりました。そうしたら、内部は平面より広がりを感じるし、ドームと校舎のあいだに変な隙間ができたのもおもしろくて、興味が出たんです。

2年生の文化祭では装飾部門の委員長に納まっていたので、予算を全部使ってゲートとインフォメーションブースを兼ねた施設をつくりました。ピロティを塞いで、そこに階段をつくり、上ると卵形のドームがあって、中では映像と音楽が流れている。そこをくぐって気分を高揚させて外に出ると情報が手に入るという、ハレとケを切り替える装置みたいなものです。

――もはや建築に近いです。かなり決定的なきっかけでしたね。

島田　ある層に入り、意識が変わって、また下りてくる。ぼくが今でもやっていることの一部はすでにここに表れています。これに味をしめて、在学中は毎年何か大きなものをつくっていました。大学院生のときの文化祭では、廃棄される選挙ポスター掲示板をもらってきて、柱材と波板を買い、外壁には漆喰を塗ったりして、かなり大規模な模擬店（「ｒｒｒ」）をつくったんです。

請けた仕事が終わったらすぐに就職するつもりでしたがいつのまにか独立していました。

Shimada Yo

仕事が続き、いつのまにか独立

――卒業後の進路はどうお考えでしたか。

島田　当然、就職しようと思い、いくつか面接に行きました。今になって自分らしい選択だなと思いますが、妹島和世さん、石山修武さん、岡部憲明さんの3人の事務所に行ったのです。実際、2～3カ月は岡部さんのところに通っていました。そうしたら7月頃、大学時代の友人が、家（「東大阪の住居」）の建て替えで困っていて、お母さんがぼくが院生の頃につくった模擬店をすごく気に入っていたので、手を貸してくれと言ってきたのです。それで、それが終わったらまた戻ってくるつもりで、神戸にいったん帰りました。

その建て替え工事の工務店はすでに決まっていたので、まず最初は現場のことを何も知らないからと頼み込んで、工事中の1軒を上棟から手伝いました。その後は毎朝6～9時までコンビニでバイトして、それから設計してという生活です。超ローコストで、設計料は結局もらったかどうかもよく覚えてないし、最後は終わらせることしか考えていませんでした(笑)。それでもなんとか終わって、設計事務所で働こうとしたら、当時、狭小住宅ブームで、『狭小住宅 Ｐａｒｔ２』(ワールドフォトプレス)にその家がのったのですが、それを見た人からまた仕事が舞い込みました。

今度はわりと広い家で、工務店をさがすところから始めて、設計料もちゃんともらいました。ただ、いつまでにどれだけお金をもらうとか、どういう契約書をいつ交わすとか、何も習っていないので、要望を聞いてから施主に一度も連絡せず、数カ月後、突然「できました」と図面を持って行ったのですが、施主は意外とすんなり「いいね」みたいな感じで、そのまま建ちました。

でも、自分が勉強が足りてないのはよくわかっていたので、今度こそ仕事をしようと思い、東京でアパートを借りる準備もしていたのですが……。

――また依頼が来たのですか。

島田　恐ろしいことにふたつも(笑)。しかも、うち1件は公共の仕事でした。西脇市で公園をつくる計画があって、ぼくがランドスケープの仕事をしている友人を紹介したところ、隣に集会場をつくることになったから、何か考えてくれと言われたのです。考えはしましたが、2社ぐらい、ちゃんとした会社が参加していたから、まさか自分に降ってくるとは思っていなかった。ところがほかの案がひどくて、いつのまにかやるはめになって……。その仕事が始まった時点ぐらいで、「ああ、これは独立しているということだな」と(笑)。その「西脇の集会所」(02)も案の定すごく大変で、死ぬかと思いました。設計期間と積算が各1カ月しかなく、当時は誰に振ったらいいかもわからないので、自分で勉強して積算書も全部つくったの

「ｒｒｒ」

大学の文化祭のためにつくった模擬店のための施設。島田さんをはじめとした学生によるセルフビルドでつくられた。

写真提供／島田陽建築設計事務所

「東大阪の住居」

島田さんが最初に設計した住宅。木製ルーバーで覆われ、ルーバーの目地が上にいくほどに広くなっている。

写真提供／島田陽建築設計事務所

階段室より

階段室の白い壁面は、奥の空間を額縁のように切り取る。内部と内部をつなぐ室内開口が空間に奥行きを生み出している。

洗面室

階段室

階段まわり

写真上／洗面室の鏡は外の風景が映り込む角度で取り付けられている。窓にある十字は手すりを兼ねるもの。中／２棟のあいだの階段室は天井と壁がガラス張りで明るい空間になっている。下／引出しのある机のような造作がそのまま階段になるつくり。

です。図面も役所の人に、「島田さん、ここの納まりの図面がないと見積もれませんよ」とか（笑）、いろいろ鍛えられました。

——なにごともつくりながら現場で覚え、人にも恵まれたんですね。

島田　そうですね。大学でみっちり建築の勉強をした人は、そのまま独立することも多いのに対し、ぼくみたいにあんまり建築専門ではない学科を出たら、普通は何年か設計事務所で修業して独立すると思うのですが、ぼくはどっちでもない。人に同じ道はとてもすすめられません（笑）。

新たな局面

——最初の住宅以降、雑誌の掲載についてはいかがでしたか。

島田　ほとんどコンスタントに出ていますが、最初のうちは一般誌でした。初めて『新建築 住宅特集』（新建築社、2009年7月号）に出たのが、10作目の「塩屋町の住居」（06）です。編集部に行くことがあって写真を見せたら、ちょうどリノベーション特集を進めているから、すぐ取材という話になって、あれよあれよという間に掲載されたんです。

——間仕切り壁にあけた窓のような開口は、この家が最初ですか。

島田　開閉できる窓は前にもありますが、フレームだけの開口はそうです。ほかにも、十字の窓など、今使っている建築言語はここから発生しました。

——それはリノベーションだからということもありましたか。

島田　そうですね。それと、この頃からやっとスタッフを雇いはじめ、つくり方が変わったのもあります。それまでは自分ひとりで黙々とつくっていたのですが、スタッフとやりとりしながらつくると言語化されるので。

——なるほど。この「タトハウス・北野町の住居2」では鏡の仕掛けなど、さらに建築言語が増えていますね。

島田　今までやりたかったことを全部ここで吐き出した感があります。ここは親の家だったこともあり、設計期間が長く、その間に考えた3案を交ぜ合わせてつくっています。当初の案は若干コンセプトが強すぎて、一時中断していました。最近多い、ワン・アイデアで「建築のコンセプトに奉仕する」みたいな家にはしたくなかったので。

——ひとつのコンセプトを際立たせるためにほかを犠牲にするようなことですか。

島田　そうです。構成はすごくいいけれど、すぐ飽きそうな。そうではないつくり方はないかと考えました。たとえば、ここでは北側から見るとふたつに割れたように見えますが、南側はひとつの造形のように見えます。コンセプトを完遂するなら、どこから見ても分棟に見えるようにつくるべきで、やや不純な状態なんですね。でも、そういうふうに、見る角度によって、あるいは意識がふとした瞬間に変化して、住宅のありようが全然違うように見えたりするほうが豊かなんじゃないかと思ったのです。

——そもそも、室内開口のような発想はどこから生まれてきたのですか。

島田　学生時代からずっともちつづけている発想です。「塩屋町の住居」でも、既存の暗い家の中に白い階段室を挿入することによって、外から内を見るとホワイトアウトしてすごく不思議に見えるし、内から外を見ると、既存の部分が今までと違って魅力的に見えるんじゃないかと考えた。ある層からもうひとつの層を見ると不思議に見えて、逆もまた違ったふうに見えるというのは、ずっと興味があることですね。

室内の開口や十字の窓など今までにやりたかったことをここですべて吐き出しました。

Shimada Yo

島田陽の仕事の流儀

——「タトハウス・北野町の住宅2」以降はいったん収束したものが拡散しているようにも見えますが、自分で意識的に作風をつくろうとは考えていませんか。

島田　まったく考えてないですね。たとえば、最近続けて発表した「比叡平の住居」（10／『TOTO通信』2013年新春号）と「二子新地の住居」（10）と「六甲の住居」（11）を見ても全然違うし、自分の建築の個人史として見ても、とっちらかってる気がします（笑）。

若い頃、作風が全然違う3人の事務所に行った話をしましたが、当時何を考えたかというと、たとえば妹島さんの平面で石山さんみたいなことをやるとおもしろいのではと思っていたのです。ハイブリッドですね。

——それは独学じゃないとできないですね（笑）。それにしても、現在の島

「塩屋町の住居」

木造住宅の改修。家の中心に白く塗られた階段室を挿入することで、構造的に補強するとともに、既存部を額縁として切り取る意匠が実現している。

写真提供／島田陽建築設計事務所

田さんがあるのは偶然、仕事が続いてきたからというだけでは、読者が納得しないと思うのですが(笑)、何かほかに理由はありませんか。

島田　自分がそんなに飛び抜けた才能があるとは思っていないし、むしろ世の中にはもっと才能がありそうなのに、うまくいかない人がけっこう多いなと思うことはあります。ただ、うっすら感じるのは、そういう人は建築をつくる能力が優秀でも、かたくなすぎて状況に対してうまく応答できていないのではないか、ということです。たとえば、うまくいかなかった人にその顛末を聞くと、「クライアントがこんなことを言い出して、ここがこうなっちゃったんだよ」と言ったりする。そういう説明をされても、ある種、殺意を覚えるというか(笑)。

――よくもそんなことが言えるな、と(笑)。

島田　少なくともぼくは「やりたいことがあるのにできない」というのは、あんまりないんです。クライアントに「やりたいことはなんですか」と聞かれても、「いや、そんなもん、ないです。あなたと一緒にやりたいことを探していくんです」という話です。いろんな諸条件をポジティブに統合する――それが建築家の仕事だとぼくは思っています。

2F
寝室

↓回転する鏡によって寝室から空が見える。開閉によって階段室や居間との距離感を調整することができる。

3F
居間

↑居間と食堂が階段室を介してつながっている。ガラス張りの階段室があいだに入り、外部のような広がりが生まれる。

Special Feature:
Self-taught
Architects

04

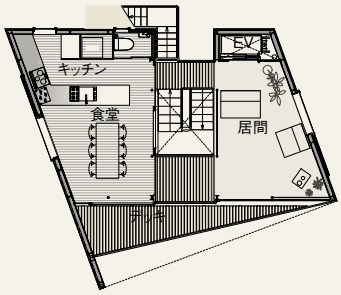
Interview
with
Shimada Yo

各階平面図

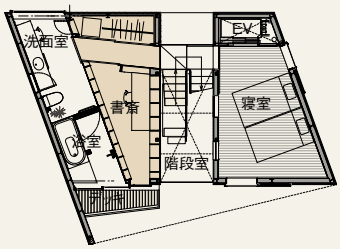
0 1 2m

1/250

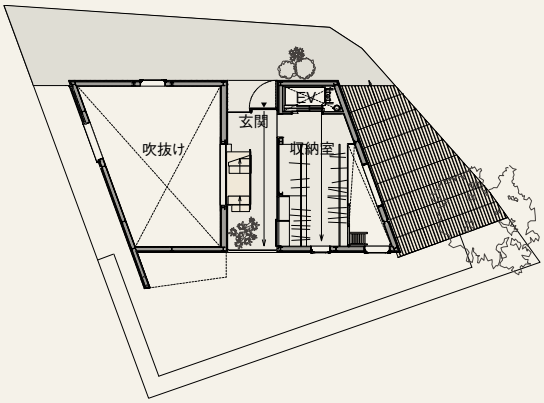
3F



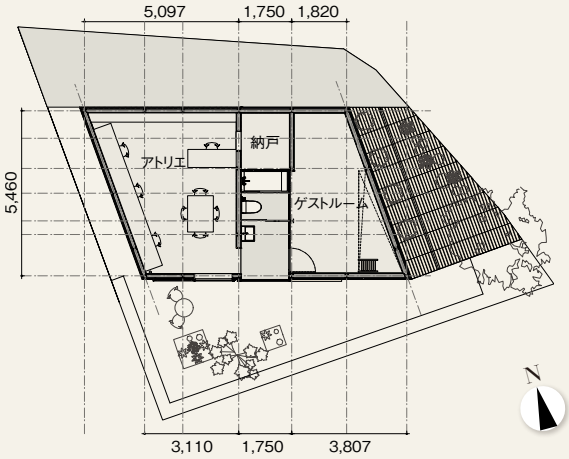
2F



1F

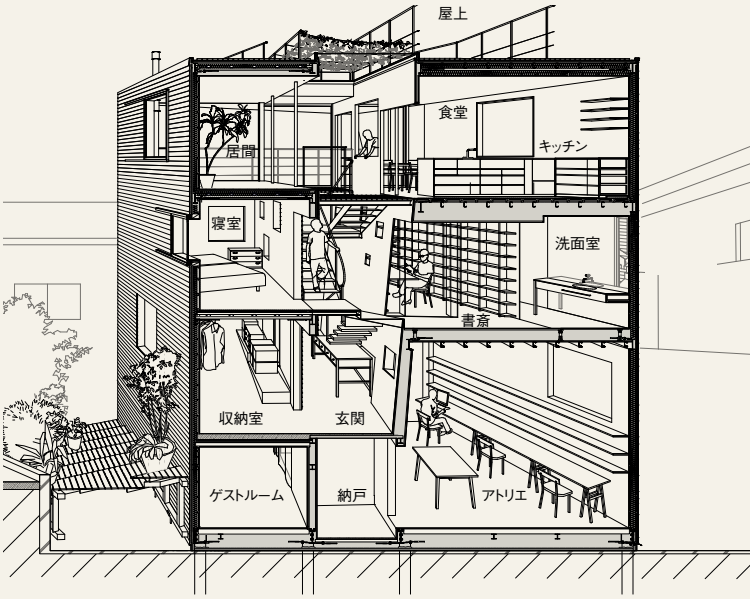


B1



断面パース

1/150



坂道の多い北野町。3階からは神戸の街並みを一望することができる。

写真上／寝室と階段室のあいだにある回転する鏡。下／姿見は収納室の靴を取り出せるスライド戸になっている。裏には下見板風の戸もあり、外壁と一体化する二重の隠し戸もある。

Special Feature: Self-taught Architects

04

Case Study of Shimada Yo

第2期の集大成の建築

文／大山直美

敷地は神戸市街から北上し、急坂を上りきった異人館街のはずれにある角地で、すぐ北には山が迫っている。建主は近くにギャラリーを構える島田陽さんの父上。神戸の街が一望できることを望んだが、土地は北側の道路より2mほど下がり、南と西にはマンションが立ちはだかる。そこで、眺望を得るべく、地下1階、地上3階建てとし、かつ道路斜線を避けるように平行四辺形の平面を導き出した。

だが、そのまま立ち上げた1棟にするとボリュームが巨大すぎて北側の景観と日照を損なうので、地上階はふたつに分割、両者のあいだに路地のようなガラス張りの階段室を設けた。階段室の1階の床がスロープになっているのは、住み手の年齢からエレベータを設置しようとしたところ、地階の天井高が確保できないことがわかり、床を傾けて納めたためだというが、かえって路地的な趣が高まっている。

北から見ると、それぞれ周辺の異人館と住宅に倣ったという異なる仕上げの外壁をもつ別棟に見えるが、南側はHPシェル状のデッキが張り出した1棟として構造的につなげている。

島田さんはこの家を「塩屋町の住居」から始まる第2期の終わりと位置づけており、室内には多様な仕掛けが集大成のように盛り込まれている。たとえば、玄関側からは引出し付きの飾り棚に見えた家具が、奥から見返すと階段の一部と化す。角度をつけた洗面所の鏡張りの壁は山の緑を室内に取り込み、洗面台は反転した鏡像と連続して食卓のように見える。

しかし、決して作為的な息苦しさは感じられない。むしろ内と外、建築と家具、さらに住み手がもつアートも渾然一体となって、変化に富んだ新鮮な空間を生み出しており、この家を介して、海と山が近い神戸特有の風景がつながったようにも感じられる。そこには島田さんが、それが建築という自覚もなく、不思議な構造物をつくっていた時代から試行錯誤を重ね、自分自身で鍛えてきた、スケール感や全体と細部に対するバランスの感性が働いているのだろう。

「タトハウス・北野町の住居2」

建築概要	
所在地	神戸市中央区
主要用途	住宅+アトリエ
家族構成	夫婦
設計	島田陽／タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所
構造設計	デザイン・構造研究所
構造	鉄骨造
施工	大澤工務店
階数	地下1階、地上3階
敷地面積	130.11㎡
建築面積	51.01㎡
延床面積	143.01㎡
設計期間	2005年1月～2007年11月
工事期間	2008年6月～2008年12月
おもな外部仕上げ	
屋根	シート防水のうえ、
	セランガンバツデッキ敷き t=30㎜
外壁	フレキシブルボード t=8㎜
	下見板張り素地、
	ラスモルノンクラック工法のうえ、
	弾性アクリルリシン吹付け
開口部	アルミサッシ、スチールサッシ、木製サッシ
外構	モルタル金ゴテ仕上げ、
	セランガンバツデッキ敷き t=30㎜（階段）
おもな内部仕上げ	
キッチン	
床	ナラ無垢フローリング t=15㎜
壁	シナ合板 t=4㎜ EP
天井	PB t=12.5㎜ EP
浴室	
床・壁	FRP 防水トップコート仕上げ
天井	珪酸カルシウム板 t=6+6㎜ VP
洗面室	
床	長尺塩ビシート t=3㎜
壁・天井	珪酸カルシウム板 t=6+6㎜ VP
居間	
床	フレキシブルボード t=6㎜
壁	PB t=9.5+9.5㎜ EP
天井	PB t=12.5㎜ EP
寝室	
床	桐無垢フローリング t=12㎜ 浮造り仕上げ
壁・天井	桐無垢板 t=9㎜
書斎	
床・壁・天井	ラワン合板 t=6㎜
玄関	
床	モルタル金ゴテ仕上げ
壁	フレキシブルボード t=8㎜
	下見板張り素地、
	ラスモルノンクラック工法のうえ、
	弾性アクリルリシン吹付け
天井	合わせガラス t=8+8㎜

島田 陽

Shimada Yo

しまだ・よう／1972年兵庫県生まれ。96年京都市立芸術大学美術学部環境デザイン科卒業。97年同大学大学院修士課程修了。97年タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所設立。おもな作品＝「タトハウス・北野町の住居2」（2008）、「六甲の住居」（11）、「石切の住居」（13）。

和菓子屋から建築家へ転身

特集／独学の建築家　その5

インタビュー

川口通正

作品

「礫明 第一期」

設計

川口通正＋川口琢磨

聞き手・まとめ／伊藤公文　写真／傍島利浩

川口通正　Kawaguchi Michimasa

川口通正さんとご子息の川口琢磨さんの二世帯住宅の居間および食堂。親子での共同設計である。経歴の異なるふたりの対話からユニークな建築が生み出された。住みながら変化していくことを想定し、まだ「第一期」と位置付けられている。

和菓子職人から一転して
建築家になった川口通正さん。
今に至るまで、どのような道を歩んできたのか。
自邸「礫明」の設計で今一度人生を振り返る
川口さんにお話を聞いた。

和菓子屋から建築業界へ

——川口さんは和菓子屋さんで修業された経験があるそうですね。

川口通正　16歳から18歳の2年半ほど、家庭の事情で和菓子屋に預けられ、小さな部屋で寝起きし、昼間は高校に行き、帰ってから和菓子づくりの手伝いという生活をしていました。

——自分の意思でその道に入ったのではないということですか。

川口　そうです。逃れられない場に投げ込まれた。でも、後から思えば珠玉のような時間でした。美しく繊細な形。豊かな季節感。そういう世界とは無縁だったので感動がありました。その経験がなかったら、今の私はなかったかもしれません。

——そこから建築へと急転回したわけは。

川口　家業が塗装屋（ペンキ屋）でしたから、流れからすると私も同じ職業に就くはずでした。しかし塗装屋の職人にはなりたくなくて、先は見えていませんでしたが、別の道に進みたいと思いました。それでも見聞も知識も少ないので選択肢は限られ、家業の延長線上の何かということでした。

——設計を志すきっかけは。

川口　原田康子の小説『挽歌』（東都書房）が映画化されて、主人公の建築技師を仲代達矢が演じていたのですが、ものすごくかっこいい。たまたま見た「東京カテドラル聖マリア大聖堂」（64）の建設記録映画のなかで、丹下先生がそびえるカテドラルを見上げる姿がじつにかっこよく、あこがれました。不純な動機ですね（笑）。

——そうして手探りで始められた。不安はありませんでしたか。

川口　同じような境遇の人、つまり逆境や不遇を乗り越えて自分の進む道をつかみ取った人のことを調べてみたら、結構たくさんいる。作家の水上勉や松本清張、作曲家の武満徹、俳優の仲代達矢。そういう人たちのことをよく知ると、自分もなんとかなるかもしれないと元気が出てくるのですね。

建築家としての下積み

——独立するまでにどのようなキャリアを積みましたか。

映画で建築家の生きざまに接しとてもあこがれました。そこから建築を夢見つづけています。

Kawaguchi Michimasa

川口　18歳から31歳まで、勤務先を7回替えました。建築関係のいろいろな業種で働きましたが、どこもいやになって辞めてしまいました。路頭に迷う一歩手前のような状態でしたが、妻に「もうあなたには勤める先はない、自分でやりなさい」と諭されて、いわば追いつめられて独立しました。

——その間、建築家になろうという望みはもちつづけていたのですか。

川口　建築がどんどん好きになっていきました。ある集まりで私の隣に今では友人の椎名英三さん、その隣に彼の師匠の宮脇檀さん、さらに西澤文隆さんがいらして、談論風発、とても楽しかったのですが、私のいる世界と椎名さんから向こう側の世界とのあいだにはものすごく深い溝があると痛感しました。それを少しでも埋めたいと思って、長いあいだ苦闘しました。

——そう思い立っても師匠がいないし、身近にそういう環境が用意されてもいない。

川口　一番の頼りは本です。手当たり次第に本を買い、読みました。古本屋にどうしても手に入れたい本があるけれど、お金がない。そういうとき、その本をこっそり最下段に押し込めておき、後で買いに行ったこともありました。

——技術的な知識や情報も本から得たのですか。

川口　本と雑誌。技術に関する雑誌の特集ページなどは、すみずみまで読み通しました。納まりについてはなるべく実物を見て、実測もしましたが、断面は見えないから雑誌に掲載されている図面が頼りでした。でも、そういうことについては独学であろうと、大きな組織にいようと同じでしょうね。本人の気合次第で、身につく度合いも違ってくる。

「家づくりの会」との出会い

——83年に独立。でも仕事が天から降ってくることはないですよね。

川口　有力なコネクションがない、実績もない。とてもつらかった。図面の下請け仕事で生計を立てていましたが、スタッフには下請け仕事は絶対にさせないと誓い、貫きました。正直に言いますとたった一度だけ手伝ってもらったことがあり、今でも後悔しています。

——相変わらず悶々と日々を過ごしていたわけですか。

川口　そうです。でも、そのときに「水清ければ魚住まず」という言葉を聞き、なるほどそういうこともあるかと気持ちが楽になったことがありました。そうこうするうちに「家づくりの会」を知りました。

——83年に泉幸甫さんをはじめ、住宅設計をライフワークとする若い建築家が結成した集まりですね。

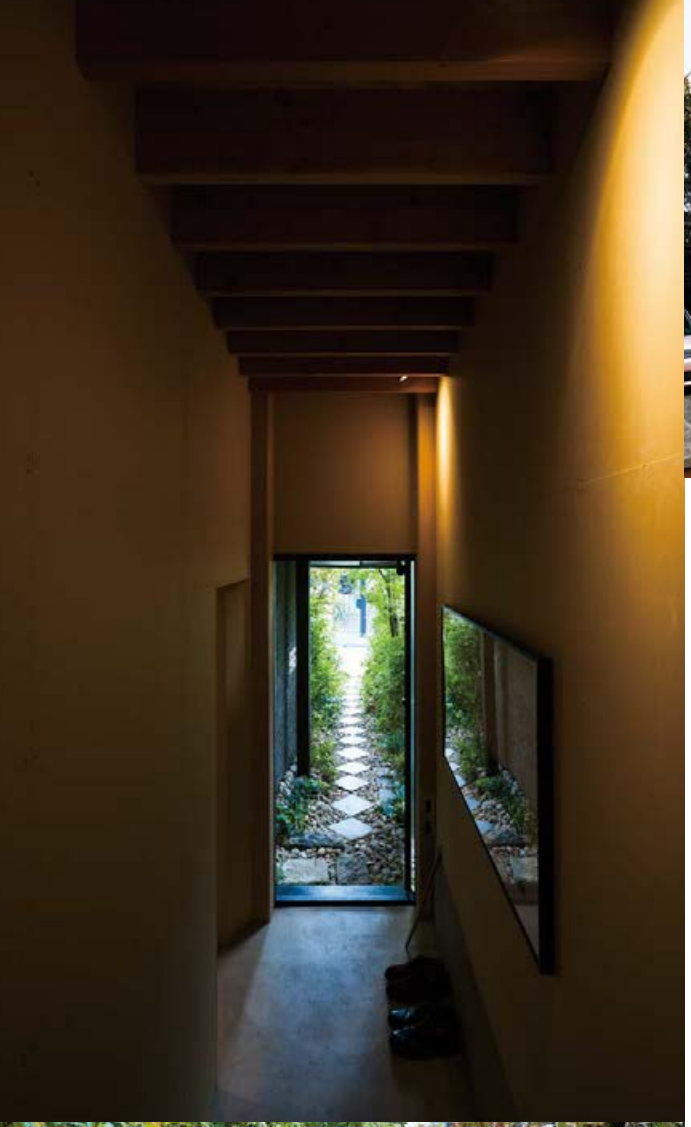
川口　『モダンリビング』（ハースト婦人画報社）のお知らせ欄を見て応募し、面接を受け、メンバーになりました。現在は45人くらいになりましたが、当時は10人程度で、組織というよりも仲間という感じでした。みな只者ではなかった。仕事もお金もないが、時間は余るほどあり、あふれるような熱情をもち、毎晩、安酒場で飲んでは議論をしていました。

——「家づくりの会」への入会が大きな転機になったということですか。

川口　学習の方向性がみえてきて、私にとってはいわば大学院のようなものでした。木材をはじめ、じつにたくさんのことを教えられたし、建築はずっと学びつづけないといけない、社会が変わるのだから建築も変わらないといけないという当然のことにも、あらためて気づかされました。

——同志を得たのも大きかったのでしょうか。

川口　かつて新宿ホワイトハウスに吉村益信、武満徹、磯崎新などが集まっていたり、豊島区のトキワ荘には藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫などが集まっていた。同じような志をもった人が結集すると、孤立して活動していたときには出てこない能力が活性化されて高まっていくことがある。「家づくりの会」にもそうした状況が生まれていました。



外観

写真上／南西側外観。背面が崖地の旗竿敷地に立ち、竿部分には豊富な植栽がある。外壁は色漆喰、木ごて摺り掻き落とし仕上げ。

Special Feature: Self-taught Architects

05

Interview with Kawaguchi Michimasa

アプローチ

写真左上／玄関からアプローチを見る。仕上げ前の素朴な壁面とアプローチの植栽の濃度の差が際立っている。下／植栽に覆われたアプローチ。地面にコンクリートを打設せず、将来変更しやすくしている。

——その輪に早い時期に入れたことは幸運でしたね。

川口「家づくりの会」に救われたといっても過言ではありません。それともうひとり、恩人がいます。写真家の小林浩志さん。編集者から独学で写真に転向した方で、独立前から知り合い、私の設計した建築のほぼすべてを撮影していただいています。彼以外に撮影を依頼したことはありません。写真に撮る際にどこが具合が悪く、どうすればよりよくなるかを細かく指摘してくださいました。ほかの設計者の建築をたくさん見ておられる方の指摘はとても貴重で、成長の糧になりました。

転機になった「映水庵」

——「家づくりの会」を通じて施主に巡りあったこともありますか。

川口　ええ。最初のケースは両国の橋のたもとに立つ、1階が喫茶店、上階が住まいの建築で、87年に竣工し「映水庵」と名づけたものです。近辺には蔵が残っていたので、コンクリートでありながら土蔵のようなイメージで設計したのですが、その頃はやっていたコンクリート打放しとは趣を異にする外観が人目をひいたようで、喫茶店を訪ねては設計者は誰かと聞きただす人が多く、そのたびに施主が私を強く推薦してくれたことから、その後7件の設計依頼がありました。

——「映水庵」で自分の設計の方向性をつかんだのですね。

川口　そういう路線でやると仕事が来るというのがよくわかりました(笑)。そこは大事なところなのですが、でも方向性をつかんだというのとは違います。

——というと、いろいろと迷いがあったのでしょうか。

川口　独学で師がいません。それは目標がない、基準がないということでもある。師をもつ人が独立後に師のスタイルを踏襲するかしないかは別として、いずれにしろ確固とした基準にはなるはずです。私にはその基準がない。だからいろいろなスタイルに関心が向くし、ひかれます。別の言い方をすると、あちこち揺れ動いて止まない、到達点をもたない、終わりがないということになるでしょうか。

——凝り固まっていないやわらかな姿勢。混成系ともいえますね。

川口　そうでしょうか。どんなことでも知らなかったことを知らされると、すごく興味がわいてきて、自分の建築に取り込みたいと思うのです。たとえば長男の琢磨は私とはまったく違う建築設計のキャリアを積んでいますが、訪ねた建築もまったく違っていて、スイスの建築を多く見ています。ピーター・ズントー、ヘルツォーク&ド・ムーロン、ピーター・メルクリ。彼が撮影した写真を見ると、空間のつくり方や素材の扱い方など、すごく刺激を受けます。

建築を学んだ境遇が違うからこそ
思考、技術、知識を相互に補完する
息子との共同設計は楽しい。

Kawaguchi Michimasa

自邸「礫明」とこれから

——自邸「礫明(れきみょう)」は琢磨さんとの共同設計ですが、ふたりの興味、関心が混じり合っているのでしょうか。

川口　そうです。どちらかひとりが担当したら、絶対に今の姿にはならなかったでしょう。発想は琢磨、納まりや素材は私が主となりましたが、あくまでも思考、技術、知識を相互に補完しあい、融合した結果です。

——年代の差は乗り越えられるものですか。

川口　意見を異にすることはよくありますが、それを刺激としてさらに一歩進んだ局面に立つという感じでしょうか。屋根勾配ひとつとっても、白井晟一の「呉羽の舎」(65)の2・2寸勾配が理想だと私が言えば、琢磨はズントーの「聖ベネディクト教会」(89)は2寸勾配で美しいと言う。そこから検討していって解決点を見出していく。そういう過程をたどるのは、創作活動として望ましいし、楽しいと私は思っています。

——これから先の方向はどう考えていますか。

川口　同年代の人のなかには俺は折り返し点だという人もいますが、私は違う。折り返しているひまはない、さらに突っ込んで行こうという気持ちです。その都度、自分としては完成形と思えた地点にたどり着くけれど、それが到達点ではない。さらに先に行こう、さらに自由を獲得したいと思っています。独学の強みでしょうか。

「映水庵」

「家づくりの会」を通じて川口通正さんが最初に設計した店舗兼住宅。両国の川縁にある。コンクリートを用いながらも、土蔵をイメージして設計された。

写真提供／川口通正建築研究所

「映水庵」

Special Feature:
Self-taught
Architects

05

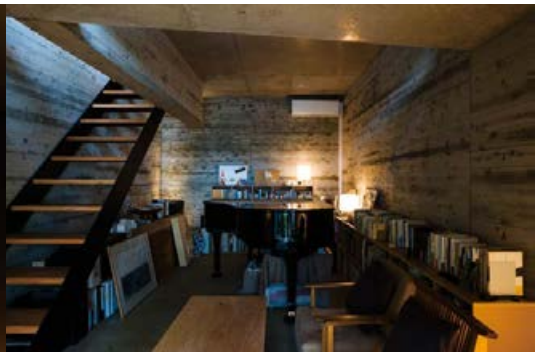
Interview
with
Kawaguchi
Michimasa

室3(1階)

↑食堂および居間。コンクリート基礎の上に木造がのる構造。敷地にそって、室内にもレベル差がある。

室1(地階)

↓コンクリートの地下室。ピアノ室として用いられている。この室から直接地下庭に出ることができる。



室5(2階)

↑将来は居間や寝室として使われる予定。さまざまな仕上げが施されていくことを想定し、壁面は下地の石膏ボードのまま。

室4(2階)

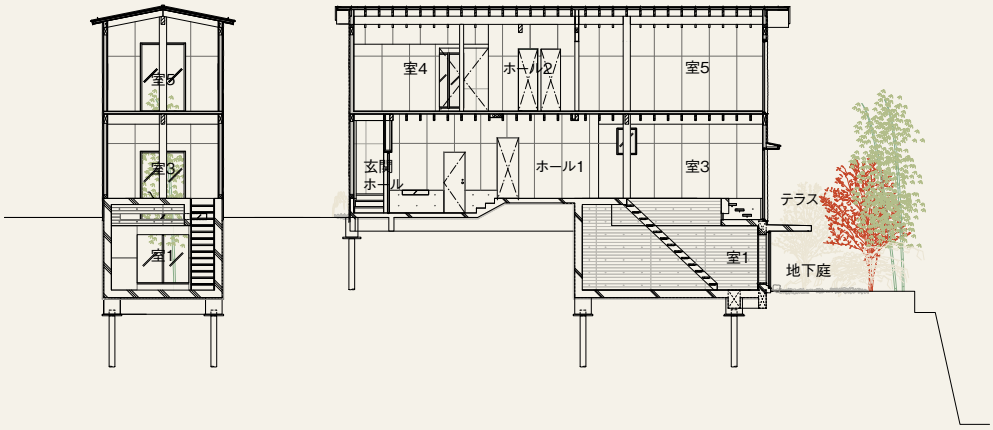
↑将来は食堂になる予定だが、今は川口通正さんの書斎として使われている。階段を上った後のたまりのような空間。

東側から見た外観。小石川の崖地に立っている。

断面図

0 1 2m

1/250



平面図

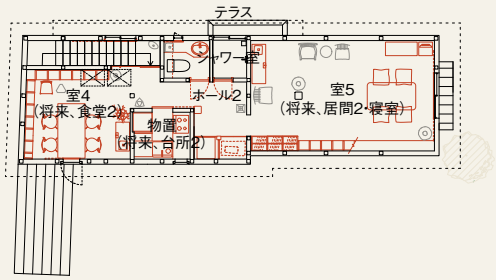
0 1 2m

N

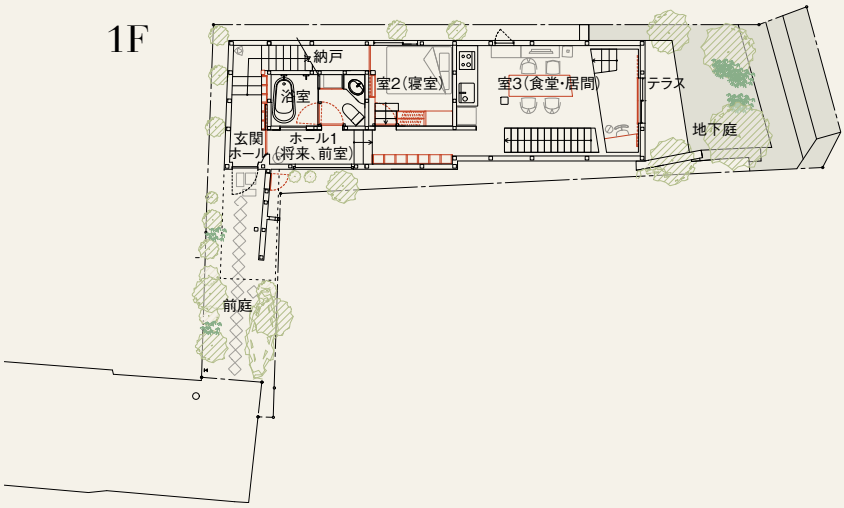
1/250

*赤字は将来の計画

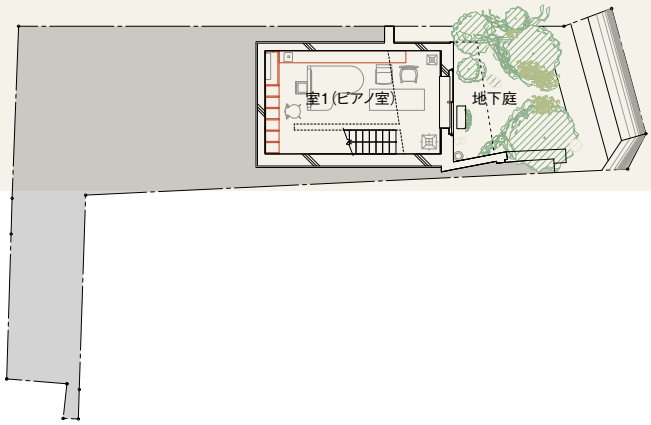
2F



1F



B1



地下庭から見上げた外観。引き違い戸は2枚を中央に揃えて開放する前提で、プロポーションが検討された。

川口琢磨
Kawaguchi Takuma

かわぐち・たくま／1980年東京都生まれ。2003年早稲田大学理工学部環境資源工学科卒業。06年同大学理工学部建築学科卒業。08年同大学大学院修士課程修了。08〜15年鹿島建設建築設計本部。

「礫明 第一期」

建築概要	
所在地	東京都文京区
主要用途	専用住宅
家族構成	親夫婦+子夫婦
設計	川口通正+川口琢磨
構造設計	彦田・田中構造建築事務所
構造	木造在来工法(地上)、鉄筋コンクリート造(地下)
施工	河合建築
階数	地下1階、地上2階
敷地面積	122.04㎡
建築面積	57.55㎡
延床面積	130.90㎡
設計期間	2009年8月〜2010年1月
工事期間	2010年2月〜2010年9月(第1期)
	2010年10月〜2020年2月(第2期以降)
おもな外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板竪はぜ葺き t=0.4㎜
外壁	色漆喰塗り壁木ごて摺り掻き落とし仕上げ
	灰色土壁調(地上)
	スギ縁甲板 w=105㎜
	化粧型枠コンクリート打放し仕上げ(地下)
	無機質系建材表面強化剤塗装(共通)
開口部	スチール特注サッシ
	高耐候性建築内外装吹き付け仕上材
	黒味錆色塗装、アルミサッシ 黒味錆色塗装
外構	敷瓦300㎜角四半敷き
おもな内部仕上げ	
室1(地階ピアノ室)	
床	コンクリート金ごて仕上げ
壁	杉板化粧型枠コンクリート打放し仕上げ
	PB t=12.5㎜
	スクエアエッジ素地仕上げ張り
	真鍮化粧プラスビス止め仕上げ
天井	化粧型枠コンクリート打放し仕上げ
1階台所・玄関ホール・ホール1	
床	コンクリート金ごて仕上げ
壁	PB t=12.5㎜ スクエアエッジ素地仕上げ張り
	真鍮化粧プラスビス止め仕上げ
	一部珪酸カルシウム板 t=8㎜ EP
天井	ベイマツ化粧梁 無塗装、ラーチ合板張り
	t=12㎜張り 無塗装
室3(1階居間・食堂)	
床	コンクリート金ごて仕上げ
壁	PB t=12.5㎜ スクエアエッジ素地仕上げ張り
	真鍮化粧プラスビス止め仕上げ
天井	ベイマツ化粧梁 無塗装、ラーチ合板張り
	t=12㎜張り 無塗装
2階物置(将来台所2)・室4(将来食堂2)・	
ホール2・室5(将来居間2・寝室)	
床	ラーチ合板張り
壁	PB t=12.5㎜ スクエアエッジ素地仕上げ張り
	真鍮化粧プラスビス止め仕上げ
天井	ベイマツ化粧梁 無塗装、ラーチ合板張り
	t=12㎜張り 無塗装

Special Feature: Self-taught Architects

05

Case Study of Kawaguchi Michimasa

異なるキャリアと発想の結節

文／伊藤公文

住宅をつくる環境は、年々、不自由になる一方だ。職人の技量、素材、法規や条例、工業製品と同等の精度を求めるクライアントなど。いろいろ考え合わせると既製の部材をごく一般的な技術で組み上げ、さっさと終わらせる方向になびかざるをえない現状がある。こうした現状に断固として反旗を翻すラジカルな住宅。それが小石川の急な崖地に立つ建築面積58㎡弱の「礫明」である。

「礫明」は親子二代の建築家の自邸。父の通正が言う。「一枚の壁の仕上げを10年考えてみる。その楽しみを味わえるのが建築家の特権で、白井晟一も自邸『虚白庵』(1970)の壁をラスモルタルのまま放置していたではないか」。その実行を阻んだのが融資実行から1年以内の竣工を義務づける住宅融資制度の仕組みだった。そこで彼らは構造体と生活のために必要な最小限の部位だけをつくりあげ、それ以外は「何も決めない」を原則とした。可能な限り完成から遠ざけ、進行形の状態にしておく。とはいえ進行形が貧相に見えてしまうのはよしとしていない。きわめつけは壁の下地材の石膏ボードで、ピンカクのボードを選び、慎重に割り付け、ビス止めの位置とピッチを正確に定めている。寸分の隙もない息づまるような仕上がり。それが進行形ゆえの仮設的な様相に溶け込んで違和感がない。茶室に通じるといえようか。

アプローチの生い茂る植栽は通正の探究の成果だろう。1階コンクリートの窓際の床を下げて地下へのあかりとりを兼ねる仕掛けは琢磨の発想か。「礫明」には、ふたりの異なるキャリアと発想が切り結び、緊張感が漲(みなぎ)りながらも、ひとつの枠に納まろうとしない自由な感覚が横溢(おういつ)している。工事期間は10年と琢磨は言うが、おそらくは永遠に未完成の作品として手が入れられつづけるのだろう。それも熟成に至る道ではなく、試行錯誤を繰り返すジグザグの道が選ばれるにちがいない。そして「礫明」から反旗が降ろされることは絶対にないだろう。

川口通正
Kawaguchi Michimasa

かわぐち・みちまさ／1952年兵庫県生まれ。和菓子屋で修業後、独学で建築を学ぶ。83年川口通正建築研究所設立。現在、ＮＰＯ法人家づくりの会理事、工学院大学非常勤講師。おもな作品＝「小鉄(こてつ)」(07)、「楓燕居(ふうえんきょ)」(09)、「木鼈(もくべつ)」(10)。

古きをなつかしむ寝台列車

旅で泊まるところはホテルとは限らない。寝台列車もホテルのようになってきた……というよりどちらが近づいたともいえない。

南アフリカのケープタウンからザ・ブルートレイン（＊1）に乗って1泊。首都プレトリアのホテルに泊まり、ロボスレイルで2泊してケープタウンに舞い戻るというコースをたどる機会があった。両者（両車？）とも特徴があってじつにおもしろいのだが、ロボスレイルについて書くと……。

そもそもオーナーのローハン・フォス氏は鉄道好きで、プライベートに車両を買い集めては走らせていろいろ楽しんでいた。この楽しみをみんなにも味わってもらいたいと1989年から寝台列車事業を興したというから、いわば道楽のような家族経営。南部を中心にアフリカをいろいろ走らせている。ゲストハウスや航空機事業もある。

プレトリア郊外にある専用駅で、オーナーが自ら行程や列車内の注意事項を説明し、自家用ジェット機で先まわりして到着駅でも大きなトランクを運んでくれたりする。スタッフはトレイン・マネジャー以下とても親切で家庭的。「お・も・て・な・し」の極致。

南アフリカやイギリスなどの古い車両を改造しているのでよく揺れ、幅860㎜のガラス窓も上下に開く。古きをなつかしむ向きにはたまらない。早く到着することを目的としているわけではないから最高速度は60㎞／h。フラミンゴがたくさんいる湖の傍では減速し、就寝時間中はなんと大草原に停まっているので静かでよく眠れる。だから2泊。

窓外はどこを向いても地平線というサバンナ。遠くに野生動物の姿や水を汲み上げている風車がチラホラし、そんな景色が何時間にもわたって続くが、まったく飽きない。

コーポレート・カラーはダーク・グリーンで室内は天然木の練付合板（＊2）に赤味の強い塗装。ゲストルーム入り口の建具は引き戸で戸袋がない。鍵もない！　ベッドは固定でベッドに入るときは短辺から。

食事時間を知らせるチャイムが聞こえ、2車両あるダイニングカーに向かう。ひとつはあの有名な柱が立ち並ぶダイニングルームでこれも修復。ドレスコードがあるので、ボウタイできめる。1、2時間ほどかける食事が日に3度あるから、ついワインを飲み、料理を食べすぎてしまい、帰国してからが心配になる。

ロイヤル・スイートには
バスタブがある。

ロイヤル・スイートだけにあるフリースタンディングの猫足バスタブを使った。

思い立って照明をすべて消し、窓をすっかり開けて停まった列車の静かな湯治としゃれこんだ。「あっ」と声が出た。なんと満天の星。もやもやしているのは天の川、ミルキーウェイ。地平線ぎりぎりまで輝いている星をしばし見とれた。

最終日の朝に「5㎞歩くエクスカーション」があって人気がある。列車を降りて沿線を約1時間半、半ズボン姿で歩いた。音が何もなく、遠い山と涼しく澄んだ朝の大気だけ。とても気持ちがいい。

今や最もぜいたくなことは、あかりを消したり、音がなかったり、乗り物に頼らずに歩くこと……ということになってしまったのか。

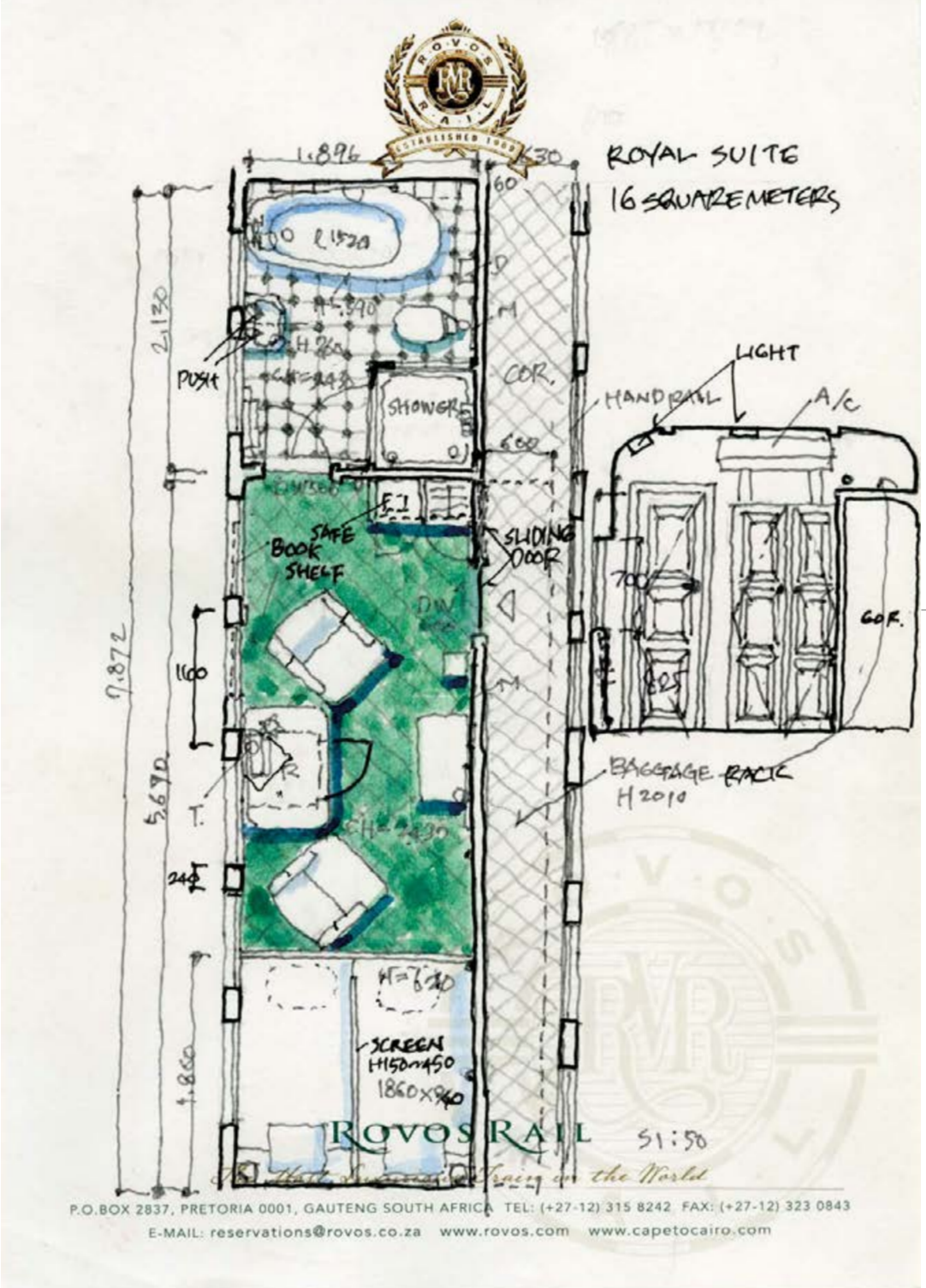
5月下旬だったが、秋から冬に向かっていて紅葉が始まっていた。

＊1／The Blue Train：南アフリカの旅客鉄道公社ラックスレールが運営する豪華寝台列車。ギネスブックにも記載がある。プレトリア～ケープタウン間1600㎞を26～27時間1泊2日で結ぶ。

＊2／天然木練付合板：薄くスライスした突き板を合板に接着材で張りつけたもの。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームⅡ』（光文社）がある。

アメニティの入ったポーチ。



バスタブは「枕木」方向に配置されている。

	URL／http://www.rovos.com
	E-mail／reservations@rovos.co.za
	Phone／Pretoria +27(0)12 315 8242
Rovos Rail	Charges／ケープタウン～プレトリア間(2015～2016)
	Royal Suites R32,570
	Deluxe Suites R24,460
	Pullman Suites R16,230

1R(ランド)=10.3189円(2014年12月22日現在のレート)

Text & Sketch by Ura Kazuya

民家と茶室のコラボ

旧山川秀峰邸　設計／吉田五十八

The House of Yamakawa Shuho
Yoshida Isoya ×
Fujimori Terunobu

畳敷きに障子の画室の上を見ると、天井がなく、小屋組が露出している。洗練された新興数寄屋の名手がこんな造りをしようとは。

連載

現代住宅併走

第二十八回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二
（吉田五十八のポートレイトをのぞく）

食堂

画室と襖（今は閉じられている）で仕切られた食堂は、梁と根太が露出し、竹の化粧仕上げとなっている。田舎家を意識した造り。

現代住宅併走

Yoshida Isoya × Fujimori Terunobu

吉田五十八については、これまであれこれ考えてきたし、取り壊された名作のいくつかも若い頃、訪れている。

そして今、判断に迷っていることがある。吉田の新興数寄屋を〈木造モダニズム〉の流れに加えるべきかどうか。このシリーズの読者ならご承知のように「聴竹居」（1928）の藤井厚二に始まり、堀口捨己、レーモンド、前川國男、丹下健三、吉村順三と続く面々の手がけた木造建築を日本独自の建築表現として括り、そのように名づけて扱ってきた。

そのとき、対抗勢力としては日本の伝統的な大工棟梁たちによる建築表現を想定していた。たとえば、社寺とか書院造とか数寄屋とか茶室などの、古より続き、明治の近代化、洋風化のなかでも生き延びてきた表現を対抗勢力とした。こうした今も生き延びる流れを〝近代和風〟と称してひと括りにするのもいいが、それでは木造モダニズムもそのなかに含まれる恐れもあり、ここでは〈木造サバイバル〉と呼ぼう。

木造モダニズム対木造サバイバル――こういう構図でこれまで考え、吉田が昭和10（35）年に定式化した新興数寄屋も前者に加えてきたが、今は迷っている。両者の中間的存在か、もしくは、新興数寄屋と堀口捨己の戦後の和風作品、たとえば名作「八勝館御幸の間」

台所と寝室

写真右／台所の棚。田舎風というか、民芸風というか。当初は土間だった。左／2階の寝室。和風というよりヨーロッパの民家風。

アプローチと玄関

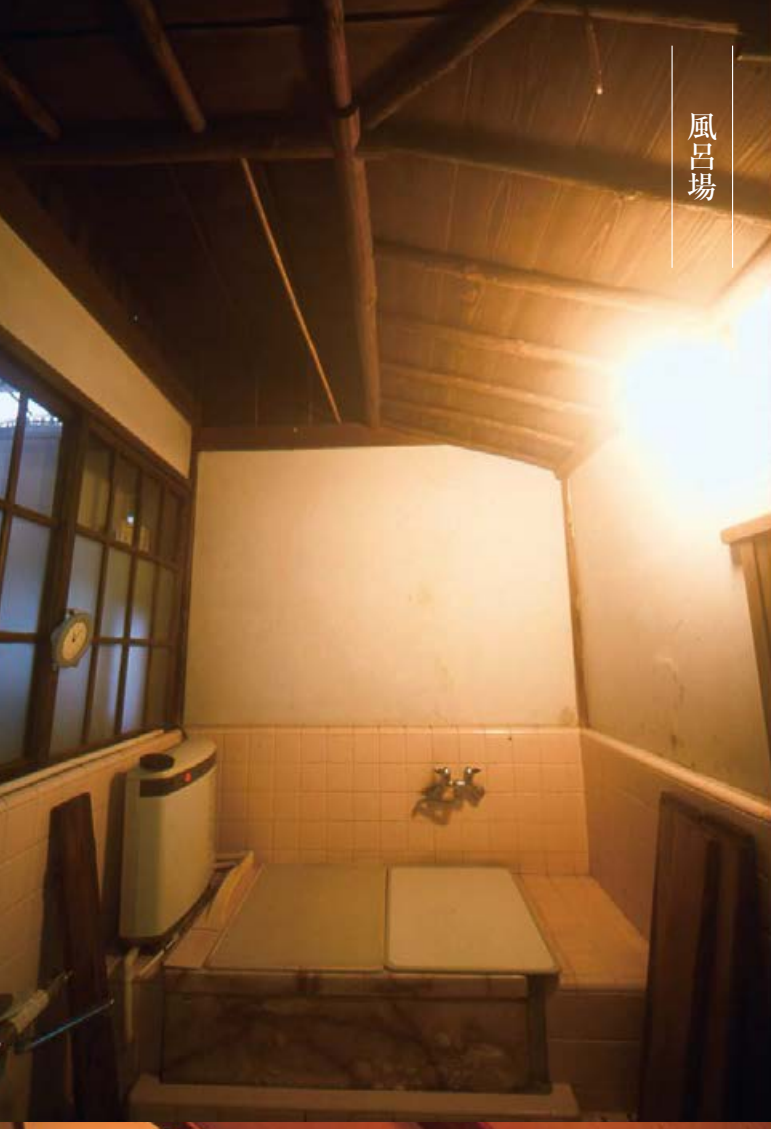
写真上／アプローチは、数寄屋風。下／玄関の三和土。床敷きの踏込みの上に大黒柱が見える。

(50)も一緒にして木造モダニズムから木造サバイバルへと移してしまいたい衝動に駆られるときがある。どんなイズムも前衛性を失ったとき、サバイバルに組み込まれていくのだから。

そんな迷いを抱えながら吉田の手になる「旧山川秀峰邸」を訪れた。日本画家の山川が、戦時中の疎開のため、別荘を兼ねて、東海道の二宮駅から近い海辺の砂丘の上に建てた。砂丘から海辺まで敷地は続き、松林の向こうに太平洋が広がる絶好の地であったが、終戦を待たず、秀峰はここで没している。息子の山川方夫が継ぐが、『三田文学』編集長として、また作家としても活躍中、交通事故死し、今は地元の添田登氏が入手して使っておられる。添田さんは若い頃、この家で秀峰から俳句を見てもらったこともあるという。

疎開用の別荘と聞き、ごく簡単な家かと思ったが、ちゃんとした門も付き、門から玄関までのアプローチも十分あり、思いのほか立派である。しかし、外から見ただけでは新興数寄屋っぽさに乏しく、地元の趣味のいい棟梁のデザインに見えてしまう。

玄関から三和土（たたき）に足を入れても



風呂場

2階への階段室

新興数寄屋っぽさは感じられず、同じ木造の伝統でも違う筋を感じる。一番の理由は、三和土に立つと、目前には狭い板の間があり、真正面に黒光りした太い大黒柱が立っているからだ。

かつては大黒柱の先まで板の間は続き、板の間の上には大ぶりな食器棚が置かれ、板の間に続いて土間が広がり、竈（かまど）と流しが据えられていた。土間、板の間、大黒柱。こんな3点セット、これまでの吉田作品では目にしたこともない。

先に進み、この家の主室というべき画室に入り、ギョッ。部屋の広さとプロポーションはいかにも日本的で落ち着き感に満たされているのに、目を上に向けると造りがただごとではなく、手斧（チョウナ）でハツった何本もの丸太梁が重なりあいながら走る。畳敷きに障子の部屋なら棹縁天井にすべきところを、天井を取り払って小屋組の梁を露出させているのだ。

土間、板の間、大黒柱の3点セットに丸太梁露出を加えれば、答えは民家。そう、茅葺きの民家の造りがこの家には導入されている。

それだけではすまない。上を見上げると、丸太梁露出が部屋の全面を覆うわけではなく、一部には平らな天井が張られるが、その形は〝掻込み天井〟にほかならず、使われているのも、平らの部分は網代（あじろ）で、支える桟は細い丸太。もちろん形も材もいわずと知れた茶室の造り。

添田さんによると、今ピアノの置いてある部屋の隅の少し入り込んだ板敷きのところにはかつて水屋があり、また、部屋の中央に近いあたりには炉も切ってあるという。

ここまで聞くと、部屋の入り口の対面側の2枚の障子を開けた先の意味不明の造りの意味が明らかになる。そこには、外から見ると、飛び石の露地が延び、皮付きの細い柱に支えられた軒の下には小さな土間があり、小さな縁があり、障子を開けると画室の中に踏み込む。茶室でいう土庇（とびさし）の造り。

民家の造りに続いて顔を出したのは茶室の造り。

意外な展開に心配になり、残りの部屋もあわてて見た。

画室の隣は、今は家具で閉じているがかつては襖で仕切られた続き間があり、テーブルが置かれ、食堂兼居間として使われていた。造りは、画室の掻込み天井がそのまま延びているから、茶室の趣味。

2階は寝室として使われ、天井を見ると造りは洋風の民家といっていいだろう。

書院造をどこかでやっていないか心配になったが、それはなかった。

この家の基本は民家風と茶室風からなり、書院造は落とし、数寄屋造もはずしている。もちろん新

NO PHOTO

今は板張りとなった大黒柱の立つ土間が描かれている。

1/150 0 1 2m

The House of Yamakawa Shuho

旧山川秀峰邸

建築概要	
所在地	神奈川県二宮町
主要用途	専用住宅
設計	吉田五十八
施工	神田岩崎工務店
敷地面積	434.00㎡
延床面積	175.43㎡
階数	地上2階
構造	木造
竣工	1943年
図面提供	東京藝術大学

吉田五十八

Yoshida Isoya

1894年、東京の太田胃散創業者の息子として生まれる。幼少より、母親に伴われ、歌舞伎界になじみ、後には歌舞伎の舞台で「プロ」として長唄を歌うまでになる。東京美術学校（現東京藝術大学）で岡田信一郎に学び、1923年卒業後、表現派系のデザインを試みたが、渡欧して伝統に目覚め、数寄屋造のモダン化を図り、新興数寄屋を打ち立てた。戦後の旅館や料亭で影響を受けないものはないであろう。しかしなぜか茶室は手がけていない。

NO PHOTO

写真提供／東京藝術大学

藤森照信

Fujimori Terunobu

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」（2000）で日本建築学会作品賞など。

断面図+平面図

NO PHOTO

併走 現代 住宅

Yoshida Isoya × Fujimori Terunobu

興数寄屋もない。なぜ、書院造も数寄屋造も新興数寄屋もないと判断したかというと、この三様式の見せ場となる床の間の付いた部屋が見当たらないからだ。

日本の伝統的木造の最大の見せ場である床の間を落とし、民家と茶室から集めてきた造形を組み合わせてつくられた家。

じつは、民家の土間と丸太梁の露出については、新興数寄屋の代表作として知られる「惜櫟荘（せきれきそう）（杵屋熱海別邸）」（40）の応接間で小規模に試みている。そのとき、奈良の大和様風の茅葺き屋根も試みている。

とすると、民家に想を得る試みをさらに推し進めるべく旧山川秀峰邸と取り組み、そのとき、民家だけではあまりに泥臭いというか鄙の度が深すぎるから、オシャレ感を加えるために民家とも血はつながりながら都の産物でもある茶室を加えたのか。ひと筋縄ではいかない住宅である。

「虎ノ門ヒルズ」

"Toranomon Hills"

新ランドマーク 環状2号線をタワーがまたぐ 巨大超高層ビル

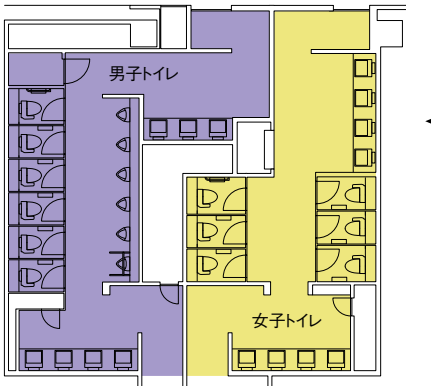
取材・文／大山直美　写真／川辺明伸

"Toranomon Hills"

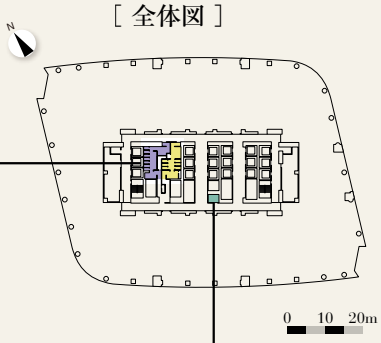
男子トイレ

トイレは南北2方向の廊下に抜けており、写真は男子トイレの北側から南側を見通したところ。左手と正面奥の2カ所に洗面コーナーがある。

［トイレ平面図］

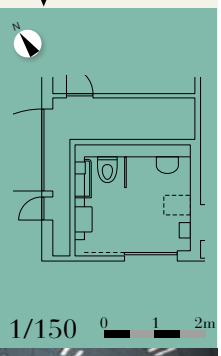


［全体図］



多機能トイレ

オフィス階の全フロアに、ライニングの高さが揃った「01」シリーズの多機能トイレを設置。オストメイト対応の汚物流しも完備している。



オフィス執務室はセンターコアを囲む約1,000坪の広大な無柱空間。

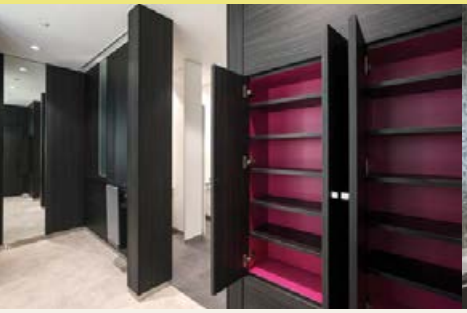
2014年6月11日、東京の新ランドマーク「虎ノ門ヒルズ」がオープンした。地上52階建ての超高層タワーは、オフィス、住宅、ホテル、カンファレンス、商業施設などを擁する複合ビル。画期的なのは、整備が進む環状2号線の道路をタワーがまたいでいるという点だ。官民一体の再開発が実現に至った経緯と、各スペースや水まわりの設計のポイントを、関係者各位に聞いた。

都心と臨海部をつなぐ環状2号線の道路計画は、戦後まもない1946年に決定されたが、中小ビルが密集した新橋・虎ノ門地区では地元に留まることを希望する地権者が多く、長く停滞が続いていたという。そこに光明をもたらしたのが、89年に生まれた「立体道路制度」であり、これにより道路上に建築物をつくることが可能となった。

さらに、02年、施行者である東京都に対し、民間事業者として助言や提言を行う「事業協力者」に森ビルが選ばれたことも、このプロジェク

洗面コーナー（写真下右）とは色調や素材を切り替え、モノトーンでまとめた。正面奥の壁はクロス張り。

女子トイレ



写真右／大理石モザイクタイルと間接照明で明るくやわらかさを出した洗面コーナー。左／壁に埋め込んだ小物入れスペース。内部の面材は南北で色を変え、こちらは南のテーマカラーである赤系に。

トを大きく前進させた。

森ビルの渡邉茂一さんによれば、同社が参画する以前は、現在より小さな中層ビル4棟を道路を避けるように分散して配置する計画だったそうだ。それよりも地下に道路を通し、大きな1棟に施設を集約したほうが競争力のある計画になるというのが森ビルの提案であり、最終的に東京都はそれを採用。09年には森ビルが「特定建築者」に選定された。

もともと新橋・虎ノ門地区は森ビル発祥の地であり、アークヒルズや六本木ヒルズでも地権者とともに超高層複合ビルをつくりあげた実績がある同社だけに、この事業には不可欠な存在だったといえるだろう。

トラバーチンと黒い木で一体感を

タワー南側の外周柱は内まわりと外まわりの2本の地下道路の中央分離帯に立っている。建物の地下躯体に道路躯体がのっており、建物の一部を地下トンネルが貫通した恰好だが、防災上、建築と道路の構造は明確に区分されているという。

設計にあたった日本設計の加藤弘治さんは「同じ東京都でも建築と土木の部署は別であり、横の連携を図るのは大変でしたが、建築だけでなく土木の担当の方たちにも全面的に協力していただいたおかげで実現に至った。互いの協力と理解がなければ、建築と土木が一体になった今回のような建物はつくれませんでした」と振り返る。

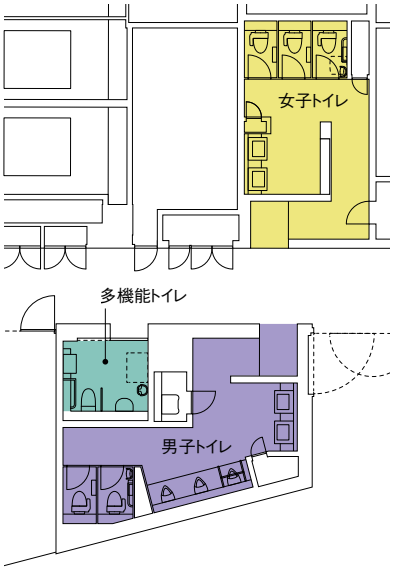
多機能トイレ

ライニング部分の壁面もタイル張りなど、素材選びの自由度が増すといい、とデザイナーの荻野さん。

男子トイレ

大理石（カプチーノロイヤル）を多用して、はなやかな感じにまとめたトイレ内部。壁面はウォールナット調の木質系シート張り。

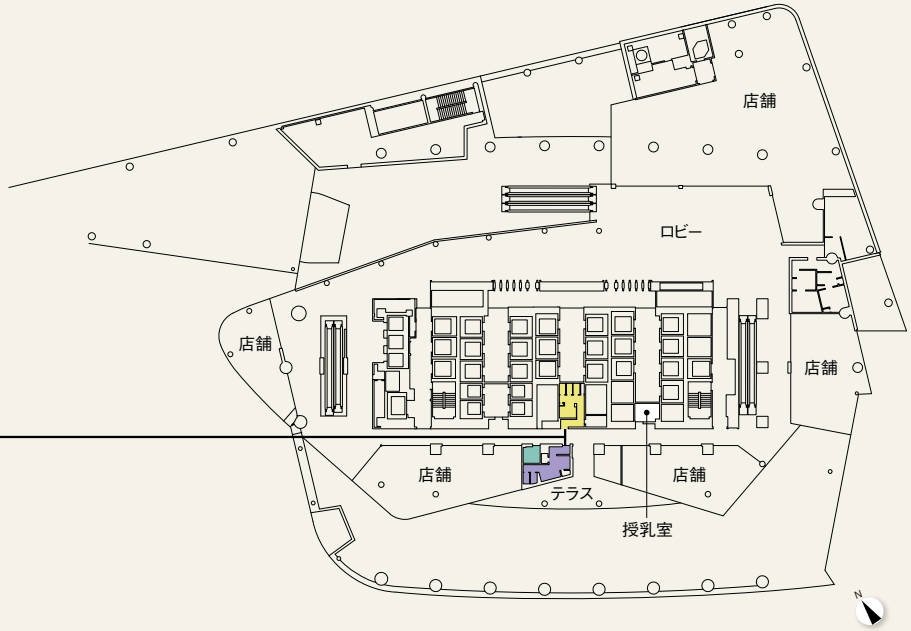
［ トイレ平面図 ］



1/200

0 1 2m

［ 3F商業階平面図 ］



1/1000 0 10 20m

回遊できるオフィスロビーと商業エリア

オフィス・住宅・ホテルが3段積みになった超高層ビルは恐らく日本初で、構造を切り替える技術が駆使されているが、その一方で、外観は異なる用途を積層した建物全体を1棟のシルエットとして見せるため、縦ラインを強調したデザインを採用したとのこと。

一体感を大切にしたデザインは、内部にも見てとれる。植木莞爾さん率いるカザッポ&アソシエイツが手がけた。2・3階吹抜けのオフィスロビーは、床にトラバーチン、壁には黒く染色した木を用いているが、オフィス基準階のエレベータホールの一部や、エレベータ内部の床にもトラバーチンを採用。共用部のコア側の壁にも黒い木のイメージの木質系シートを採用している。

オフィスの執務室はセンターコアを囲んでぐるりと一周できる約1000坪の無柱空間。タワーが道路をまたいだからこそ獲得できた広さといえる。室内は白い壁とグレーのカーペット敷きの床という、テナントが入りやすいニュートラルな内装だ。

一方、トイレは木目調のシートや大理石モザイクタイルなど、素材感のある材料を生かした、やわらかな印象。「少しでもオフィスワーカーが気分転換できる空間にしようと、素材選びと明るさ感には気を配りました」と加藤さんは言う。

女子トイレ

写真上／ベッセル型の洗面器には特注でオートソープディスペンサーを設置。左／ブース内はすべてベビーシート付き。写真の1ブースのみ手すりと扉の陰にフィッティングフロアを完備している。

授乳室

授乳室は、オレンジ色のアームチェアが目を引く。オムツ交換台やベビーシートも備えた、ゆとりのスペース。

次に、3階の商業エリアを見学した。設計は前述のオフィスロビーと同じカザッポ&アソシエイツ。通常、複合ビルではオフィスと商業エリアが分断されているが、ここではセキュリティ上、仕切られたオフィスのコアを囲むようにオフィスロビーと商業エリアが配置されており、両者は自由に回遊できる。

担当の荻野佳宏さんいわく、「まず中央に黒いイメージのコアをつくり、そのまわりのロビーと商業エリアは一周しても違和感のない空間を目指しました」。硬いイメージになりがちなオフィスのロビーは美術館のホワイエのようなやわらかさを出したいと考え、木を一度脱色してから黒く染色した壁とトラバーチンを採用。床については御影石に比べて傷みが懸念されるため、当初は森ビルとのあいだでかなり葛藤があったが、最終的には経年変化も味ととらえることで合意が得られたそうだ。

トイレはオフィスロビー脇と、商業エリアの中ほどの2カ所にあるが、撮影したのは後者で、ベージュ系の大理石が目を引く上質なインテリア。単に用を足すのではなく、リラックスできる空間にすべく、ややはなやかな感じにまとめたという。

日本を熟知した外国人ならではのホテルデザイン

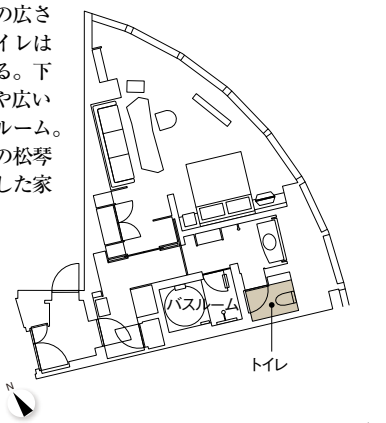
最後に最上層部のホテル「アンダーズ 東京」を見学した。アンダーズ

47〜50F

アンダーズ ラージ キング

Andaz Large King

写真上／全体の面積にかかわらず、水まわりはゆとりの広さを確保し、トイレは独立させている。下／標準よりやや広い65㎡のゲストルーム。右奥は柱離宮の松琴亭をイメージした家具。

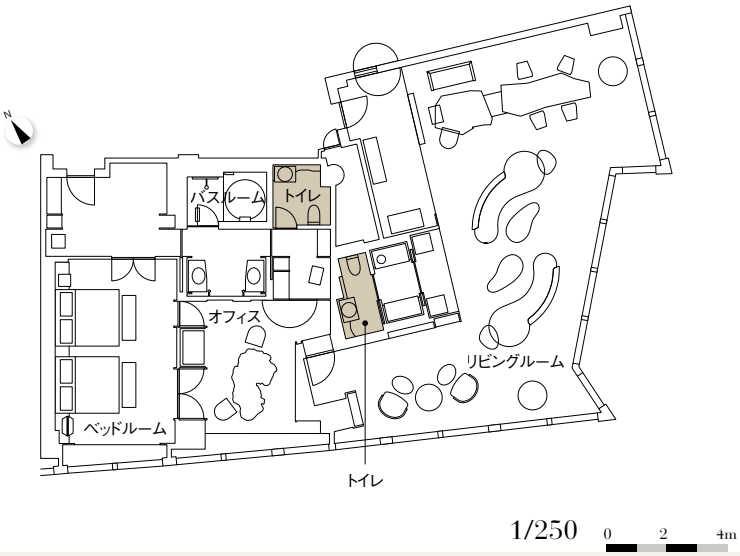


49〜50F

アンダーズ スカイ スイート

Andaz Sky Suite

写真上／49階と50階に各1室ある、広さ210㎡のスイート。東京タワーと東京湾が望める角部屋。右／左奥に円形のバスタブと洗い場のある浴室、右奥にトイレがある。左／水まわり内部にも木がふんだんに用いられている。



は日本初上陸のハイアットグループのホテルで、ヒンディー語で「パーソナルスタイル」の意。レセプションカウンターをなくし、椅子とテーブルのあるラウンジで各スタッフがタブレット端末によるチェックインを行うなど、旅にまつわるストレスを軽減し、友人宅のリビングに招かれたような居心地のよさを追求していると、アンダーズ 東京の広報担当の寺本美那さんは語る。

164室の客室のインテリアを手がけたのは、ニューヨークを拠点に活躍するトニー・チー氏。「彼は幼少期に台湾の本格的な日本家屋で育ったので、私たち以上に日本の文化や美意識を尊重しています」と寺本さん。室内には、無垢の木や和紙など自然素材が多用され、カーペットは唐草色、客室にも桂離宮の松琴亭を思わせる市松模様の家具が置かれるなど、いわゆる和モダンのホテルとはひと味違う、独特のセンスが感じられる。

水まわりは洗い場のある浴室、洗面所、トイレが独立した日本スタイル。お風呂という日本文化を尊重し、ゆったりお湯に浸かれるバスタブは海外のゲストにも好評だそうだ。

ほんの始まりにすぎない

森ビルの渡邉さんは今後についてこう語る。

「かつて六本木ヒルズでは、街のなかに街をつくる『タウンマネジメン

虎ノ門ヒルズ

建築概要	
所在地	東京都港区虎ノ門1−23−1〜4
主要用途	事務所・住宅・ホテル・店舗・カンファレンス・駐車場他
事業主	東京都
特定建築者	森ビル
設計・監理（全体）	日本設計
インテリア（商業階）	カザッポ&アソシエイツ
ホテル（客室）	トニー・チー
施工（建築）	大林組
施工（設備）	三建設備工業
敷地面積	17,068.95㎡
建築面積	9,390.76㎡
延床面積	244,360.27㎡
構造	鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造+鉄筋コンクリート造
階数	地下5階、地上52階、塔屋1階
アンダーズ東京	47F〜52F（客室164室）
オフィス	6F〜35F
ショップ&レストラン	1F〜4F
高さ	247m（最高部255.5m）
設計期間	2003年12月〜2011年3月
施工期間	2011年4月〜2014年5月
開館開所	2014年6月11日

おもなTOTO使用機器

アンダーズ東京

●客室（アンダーズラージキング+スカイスイート）
ウォシュレット一体型便器CES9573R特
●男子トイレ
ウォシュレット一体型便器CES9573R特／
小便器UFS800CE
●女子トイレ
ウォシュレット一体型便器CES9573R特
●多機能トイレ
フラットカウンター多目的トイレパックXPDA4RS3211

オフィス27階

●男子トイレ
大便器ユニットUTEC53/54
（大便器C473PD・ウォシュレットTCF584R特・
棚付2連紙巻器YH702・手すりT112CR/L7特）／
小便器ユニットUTEU53（小便器UU500D・
小便器用手すりT112CU2）／
洗面器ユニットUTEL特（洗面LS910CR特・
洗面水栓TEN61A1SX特・
電温REW10/20A1CAT1N）
●女子トイレ
大便器ユニットUTEC53/54
（大便器C473PD・ウォシュレットTCF584R特・
棚付2連紙巻器YH702・手すりT112CR/L7特）／
洗面器ユニットUTEL特（洗面LS910CR特・
洗面水栓TEN61A1SX特・
電温REW10/20A1CAT1N）
●多機能トイレ
フラットカウンター多目的ユニットXPUTVD42

商業3階

●男子トイレ
大便器C473PD／ウォシュレットTCF584R特／
小便器UFS800CE／洗面LS911CR／
洗面水栓TEN22ARX／電温REW12B2BH
●女子トイレ
大便器C473PD／ウォシュレットTCF584R特／
洗面LS911CR／洗面水栓TEN22ARX／
電温REW12B2BH
●多機能トイレ
フラットカウンター多目的トイレパック
XPDA3RSA81AWWG

森ビル
広報室

渡邉茂一
Watanabe Moichi

日本設計
建築設計群
シニアアーキテクト

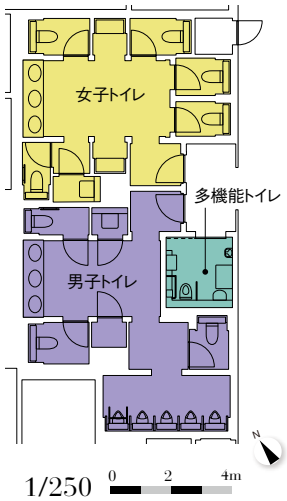
加藤弘治
Kato Koji

カザッポ&アソシエイツ
デザイナー

荻野佳宏
Ogino Yoshihiro

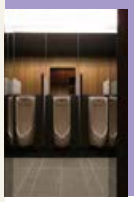
アンダーズ 東京

Andaz Tokyo



アンダーズ 51F レストルーム

Andaz Tokyo Rest Room



男子トイレ

ラウンジに隣接したパブリックトイレ。あえて照度を落とし、天然石や木質系の素材を厳選して、上質さを演出している。

多機能トイレ

ここもオフィスや商業エリア同様、オストメイト対応の「01」シリーズを採用。

ト』という考え方を基本に、街の鮮度を高めてきたのに対し、虎ノ門ヒルズの場合は今後、周辺も含めた『エリアマネジメント』をどうするかが課題です」

虎ノ門ヒルズのまわりには、虎ノ門パストラル跡地の再開発、虎ノ門病院を含む超高層計画、ホテルオークラ東京の建て替えなど、2020年の東京オリンピックに向けた再開発が目白押しだ。森ビルも虎ノ門ヒルズを起爆剤に、向こう10年間に周辺の港区で10程度の大規模プロジェクトを推進するという。10年後、はたしてこの界隈はどんな街に変貌を遂げているのだろうか。

（株）平成建設

Heiseikensetsu

職人も育てる会社

代表取締役社長 秋元久雄さん

好況に沸く建築業界で、職人不足があらためて浮き彫りにされている。だが職人不足、後継者不足は、何年も前から指摘されていたことで、突然降って湧いた問題ではない。220人の職人を抱え、「建築工程の内製化」に取り組む平成建設に、ここ数年メディアが群がるのは、わかっていても誰もやらなかったこと、できなかったことに正面から立ち向かって、成功しているからだろう。たったひとりからスタートし、今や550人の社員を抱える企業へと成長した平成建設、そのトップである秋元久雄さんに注目が集まる所以である。

職人は作業員ではないという信念

秋元さんが平成建設を起こしたのは、その名のとおり平成元（1989）年。ハウスメーカーでトップセールスを続けた後の独立だった。「この仕組みをつくりたかった」（秋元さん）というのは、独立以前からこのままでは職人がいなくなってしまうという危機感があったからだ。起業後、指導もできる職人も含めて10人単位でスタッフを増やし、職人の量、質を少しずつ充実させていく。

しかし、体制が整ってきたからといって、すぐに住宅市場に打って出たわけではない。「経営的に考えれば、住宅は大変。会社が未熟な状態で手を出すべきではないと思っていました」（秋元さん）とのことで、集合住宅や病院、店舗などをもっぱら手がけ、会社の体力を養っていく。

ただ、「職人は、作業員とは違う。生産性を追い求めて作業を単純化すれば、職人のやりがいが失われる」というのが、当初からの秋元さんの信念。会社の体力を養う時期でも、その思いは変わらなかった。いい例がハイグレードの賃貸集合住宅である。ハイグレードの仕様にするには、工事も手間がかかる。「丁寧な職人仕事を評価してもらうことで、誇りがもてるようになる」（秋元さん）のは確かだが、一方できちんと賃貸住宅として需要がなければならない。「こちらのやりたいことを理解してくれるお客さんがいないとできません」と秋元さんは言うが、空室どころか人気物件となっている実績と信頼があるからこそ、理解してもらえるともい

写真上／平成建設が手がけたA邸中庭にて（以下、写真はすべてA邸）。下右／大勢の客が訪れるA邸では、ゲスト棟を備えており、ゲスト棟には広々としたトイレが用意されている。下左／2階のシャワーブース。浴室とは別に寝室脇にシャワールームをもつ。

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

Akimoto Hisao

秋元久雄（あきもと・ひさお）／1948年静岡県生まれ。韮山高校卒業後、自衛隊体育学校に入学し、ウエイトリフティング選手としてオリンピック出場を目指す。その後、ディベロッパー、ハウスメーカーなどを経て、89年に平成建設を設立。

える。秋元さんの大胆にして緻密な戦略である。

「競争の原理」で職場に緊張感を

平成建設が注目されるもうひとつの理由が、職人の多くが大卒・大学院出身の高学歴の若者たち、ということだ。従来の、丁稚奉公的な職人のイメージと大きく異なる。平成建設が求める、独特の「職人像」があるからだろう。

平成建設で「職人」と呼ばれるのは、木工事に関するすぐれた技術をもつ大工と、型枠や鉄筋など基礎から軀体にかかわる工事をひととおり扱う「多能工」。テレビや雑誌では、「多能工」についてピックアップされることが多いが、秋元さんは「3種類や4種類の工事ができるのはあたりまえ。10種類くらいできるようになって、初めて多能工と呼べる」と手きびしい。

彼らには「先輩の技を盗む」だけにとどまらず、教えられることを次々に吸収し、自分で判断して動くことが求められる。そのため、目的意識や向上心をしっかりもっていなければとても務まらない。結果として、高学歴者しか残らない、ということかもしれない。ただ、「職場には競争の原理が働いていることが望ましいと思います。いい意味で、つねに下の人間に脅かされていないと、上の人間の成長が止まってしまう。だから、新人のレベルも下げられない」（秋元さん）。つねに上を目指す緊張感が、会社のなかに満ちている。

2008年からは毎年50人前後の採用を続ける。「もっともっと人を育てたいから」と秋元さんは笑う。むろん提供する建築の質を上げていくことも忘れてはいない。神奈川、東京へ少しずつ進出しているのも、足場固めの一環なのだろう。今後、住宅が余る時代になるといわれても「家もオフィスも、現状に満足している人は少ない。不満がある限り、必要な建築はなくならない」と強気だ。既存のゼネコン、工務店が将来への明確なビジョンが描けないでいる現在、平成建設の躍進は一層まぶしいものに見える。

取材・文／市川幹朗　写真／山下恒徳

Data

Heiseikensetsu

(株)平成建設
●本社所在地
静岡県沼津市大岡1540−1
●電話
055−962−1000
●代表取締役社長
秋元久雄
●会社設立
1989年
●従業員数
550名
●事業内容
建築工事全般、不動産業
●売上高
150億円（2014年10月期）
●関連会社
(株)平成総研
不動産プラザ
(株)工栄建設
●URL
www.heiseikensetu.co.jp/
●TOTO使用機器
・バスルーム
シャワーユニット
・1階トイレ
ウォシュレット一体型便器
ネオレストAH1、
プッシュボタン小便器

写真左上／A邸外観。中庭を囲むロの字の構成で、写真手前がゲスト棟、奥が日常の生活空間。中／生活スペース1階。手前からダイニング、リビング、書斎ともなる和室が続く。下／右から、テラスとしても使える中庭、ゲスト棟の和室、広々とした玄関。

TOTO出版が25周年を迎えました

TOTO Publishing
25th
Anniversary

TOTO出版は、2014年11月に25周年を迎えました。これまでのみなさまのあたたかいご支持に深く感謝いたします。
TOTO出版は、建築やデザインのもつ力を広くお伝えすることにより、生活文化の向上に寄与したいとの思いで、1989年に創設されました。そして、後世に残すべく質の高い書籍づくりを目指し、国内外の建築家やデザイナーの思想を、その作品や言説などを通じて紹介してきました。95年からは、TOTOギャラリー・間と連動した展覧会関連書籍の刊行を開始し、出展者の思想や価値観を伝える書籍も刊行しています。そしてこのたび、日本が生んだ世界的建築家であり、今なお建築界への影響力を失わない丹下健三が、自らカメラで撮影したコンタクトシートの全容を紹介する『TANGE BY TANGE 1949–1959／丹下健三が見た丹下健三』を記念出版いたします。
これからも初心を忘れず、みなさまに知る喜び、学ぶ楽しさを感じていただける書籍づくりを目指していく所存です。どうぞご期待ください。

司会・まとめ／伊藤公文　写真／（63ページ）丹下健三、対談・藤塚光政、丹下健三ポートレイト・撮影者不明

TOTO出版25周年記念

対談 丹下健三は何を見ていたか

岸 和郎 ＋ 豊川斎赫

2015年1月から3月にかけて、TOTOギャラリー・間で展覧会「TANGE BY TANGE 1949—1959／丹下健三が見た丹下健三」が開催され、それに合わせて同名の書籍がTOTO出版25周年記念として出版されます。この企画全体の監修者である岸和郎さんとゲストキュレーター・編著者である豊川斎赫さんにお話をうかがいます。

Kishi Waro
Toyokawa Saikaku

丹下健三が撮影した写真

豊川斎赫　2007年、私が丹下研究室に関する博士論文を仕上げたとき、研究室OBの方々が集まりを開いてくださり、その席で初めて丹下さんのご遺族にお目にかかりました。それが縁でお宅にうかがったところ、丹下さんが撮影された35㎜のモノクロームの写真のコンタクトシートを台紙に張ったものを示され、整理をしてほしいということでした。

岸 和郎　丹下さんが撮影された写真は、初期の作品集『現実と創造』をはじめ、当時の雑誌などにかなり多く使われていますが、その元になる写真というわけですね。

豊川　そうです。相当の量で、台紙にすると88枚もあって、大半は公になっておらず、公にされた写真の多くはトリミングがなされた後の状態のものでした。13年、生誕100周年のさまざまな展示のなかでも散発的に使われましたが、コンタクトシートの全容が知られる機会はありませんでした。

写真上／丹下健三が自身の作品を自ら撮影したコンタクトシート（写真は「広島平和会館原爆記念陳列館」の施工現場風景）。左／「広島平和会館原爆記念陳列館」（広島県広島市、1952年／1952年撮影）。墓地のなかから立ち上がる広島平和会館原爆記念陳列館。この敷地はもともと墓地であった。墓石自体原爆に照射され焼けている。その墓を守る人もいなくなり、多くは無縁仏になった。

何にこだわったか

岸　丹下さんというと「国立屋内総合競技場（代々木体育館）」(64)や「東京カテドラル聖マリア大聖堂」(64)を設計し、海外にはなやかな活躍の場をもった巨匠というイメージが強烈で、多くの人にとって自分とは縁遠いはるか上空の存在として意識せざるをえなかったと思います。実際、私自身がそうでした。けれども、コンタクトシートを初めて見たとき、一挙に意識が変わりました。

豊川　自身が撮影したものを、自分で台紙に張り、気に入ったものに◯(マル)をつけたり、赤いトリミングラインを入れていたりと、創造活動に携わるひとりの建築家のありのままの姿を認めることができますね。

岸　コンタクトシートはごまかしが利かない。自分が歩き、眺めた順番のとおりに途切れなく並び、露出が正しいものも間違っているものも並置される。そこからは、ひとりの建築家として何に興味をもち、それを自分の目でどうとらえようとしたかがよく伝わってきます。仔細に見るほどおもしろく、興味がつきません。初めて丹下さんが自分にとって近しい存在に思えました。

豊川　丹下さん自身が設計した建築の写真が多いのですが、とかく埋もれがちであった「倉吉市庁舎」(57)の美しい姿、執拗にファサードのみを撮りつづけ、ありうべき内観のカットがない「旧都庁舎」(57)など、はっとさせられる意外性があったり、なるほどと得心がいったり、見る人によってさまざまな想いや解釈が引き出されるでしょうね。

岸　自邸の写真もとても興味深い。工事中のカット、ヘリコプターから撮影したカットとそのトリミング、完成後の築山を入れたカットなど、これまで目にする機会がなかった写真がたくさんあります。

豊川　岸さんはとりわけ「広島平和会館原爆記念陳列館」(52)の妻側を撮った写真、そこに引かれたトリミングラインに非常に関心をもたれていましたね。

岸　右側のトリミングラインが2本引かれていて、迷いが見られます。背後に家屋が写っていますが、そのシルエットをどこで切るか、棟を入れるか、それとも入れないか、その迷いだったと推測します。棟まで入れると日本的な伝統の特質が浮上します。入れないと片流れにも見えるし、シルエットの存在が抽象化され、薄められます。

豊川　その指摘には虚を突かれました。まったく気がついていなかったので。それがきっかけで、コンタクトシートを総体として丸ごと展示し、それを本の形にまとめることに意味があるのではないかと思い始め、この企画につながったのだと思っています。

岸　巨匠丹下健三の神話化は13年の一連のイベントで、行き着くところまで達した感があります。ここではそれに追随するのではなく、「丹下の眼」をあえて加工をせず、迷走も含めてそのままに提示するこ

丹下健三

1913～2005

建築家、都市計画家。大阪府生まれ。1938年東京帝国大学工学部建築学科卒業。戦後、東京大学建築学科で教鞭をとり、槇文彦、磯崎新らを育成した。代表作に「広島平和会館原爆記念陳列館」(52)、「国立屋内総合競技場（代々木体育館）」(64)、「東京カテドラル聖マリア大聖堂」(64)、「日本万国博覧会フェスティバルプラザ」(70)、「ナイジェリア新首都都心計画」(82) など。

『TANGE BY TANGE 1949-1959
丹下健三が見た丹下健三』

Present

監修：岸 和郎、原 研哉
編著者：豊川斎赫
定価：本体15,000円+税

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方のなかから、
抽選で5名の方に
プレゼントいたします。

2015 1/23 Friday → 3/28 Saturday

丹下健三氏自ら撮影した自身の作品など70余点のコンタクトシートにより、建築家丹下健三の初期像を紹介します。本展ではコンタクトシートに自身で描きこんだ、トリミング指示の赤線を通して、丹下氏がどのように自身の建築を見ていたか、そして建築とどう対峙していたかを探ります。

シンポジウム

「丹下健三没10年
『今、何故、丹下なのか』を問う」

会期	2015年3月22日(日)13：00開場、14：00開演、17：30終演（予定）
会場	建築会館ホール（東京都港区芝5-26-20）
定員	350人／参加無料
参加方法	ウェブサイトより事前にお申し込みください。2月15日(日)まで申し込み受付中。抽選のうえ、3月13日(金)までに結果をご連絡いたします。

とで、生身の建築家の活動の様子を知ってもらいたいと思いました。ですから、展示や本を見る人には推理小説を読み解くように、オリジナル資料のなかに分け入って、自分なりの真実を発見する、あるいはストーリーを組み立てる姿勢が求められるでしょうね。

何を見てきたか

豊川　撮影されたのは50年代、年齢的には丹下さんが36歳から46歳までの10年間、作品としては広島の計画から「香川県庁舎」(58)までをカバーしています。その間、丹下さんは海外に5回渡航し、世界の俊英と交わり、インド、ブラジル、イタリア、京都ほか、古今の目ぼしい建築を見てまわっています。そうした若々しく、精力的で、グローバルな活動の全容が、コンタクトシートのモノクロームの画面を通してたどれるのも、今回の展覧会と本の魅力です。今の若い建築家の方々にとって、大きな刺激になるはずです。あわせて丹下さんが主として一般紙に書かれた平明な文章も掲載されていて、当時の丹下さんの考え方が立体的に理解されるだろうと考えています。

岸　本の構成、体裁は原研哉さんに一任しています。35㎜のコンタクトシートを原寸できれいに見せることを主眼にして、コンタクトシートを張りつけた台紙の撮影ひとつをとってみても、ベースとなる紙の選定にとてもこだわられたとうかがっています。出来上がりがとても楽しみです。

Kishi Waro

監修者

岸 和郎

建築家。1950年神奈川県生まれ。京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授。93～2010年京都工芸繊維大学にて教鞭をとる。その間、カリフォルニア大学バークレー校、マサチューセッツ工科大学で客員教授を歴任。10年から現職。93年日本建築家協会新人賞、96年日本建築学会賞など、受賞多数。

Toyokawa Saikaku

編著者

豊川斎赫

建築家、建築史家。1973年宮城県生まれ。国立小山工業高等専門学校建築学科准教授、芝浦工業大学大学院非常勤講師。工学博士、一級建築士。東京大学大学院工学系建築学専攻修了後、日本設計を経て現職。丹下健三生誕100周年プロジェクト(瀬戸内国際芸術祭2013)実行委員。著書に『群像としての丹下研究室』(オーム社)ほか。

企画展紹介

TANGE BY TANGE 1949-1959
KENZO TANGE
AS SEEN THROUGH THE EYES OF
KENZO TANGE

“TANGE BY TANGE 1949-1959”

丹下健三が見た丹下健三

Next Exhibition at TOTO GALLERY・MA　次回予告

(仮)藤本壮介展

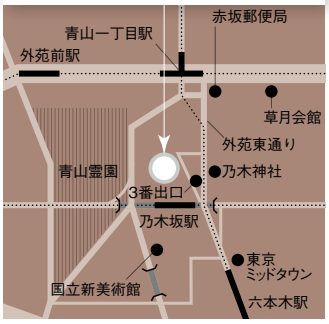
「武蔵野美術大学美術館・図書館」「Serpentine Gallery Pavilion 2013」など国内外での活躍が目覚ましい若手建築家・藤本壮介氏による展覧会を開催します。会場では、無数の模型を元に、これからの藤本壮介建築設計事務所を紹介いたします。模型を通して思考の過程を紹介するとともに、氏の現在、これからの活動を探ります。

会期	2015年4月～6月
講演会	2015年4月28日(火)
	イイノホール
	※事前申し込み制
	詳細は2月中旬、
	TOTOギャラリー・間
	ウェブサイトにアップします。

TOTO
ギャラリー・間
↓

所在地	東京都港区
	南青山1-24-3
	TOTO乃木坂ビル3F
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00～18:00
休館日	日曜日・月曜日・祝日
	ただし3月22日(日)は開館
入場料	無料
アクセス	●東京メトロ千代田線
	「乃木坂」駅下車
	3番出口徒歩1分
	●都営地下鉄大江戸線
	「六本木」駅下車
	7番出口徒歩6分
	●東京メトロ日比谷線
	「六本木」駅下車
	4a出口徒歩7分
	●東京メトロ銀座線・
	半蔵門線、都営地下鉄
	大江戸線「青山一丁目」駅
	下車4番出口徒歩7分

GALLERY・MA



www.toto.co.jp/gallerma/

TOTOの最新情報

TOTO News 1

TOTOが「世界の持続可能性の高い企業」として4年連続で評価されました

ＴＯＴＯは、世界的な社会的責任投資（ＳＲＩ※１）指標である「Dow Jones Sustainability Indices（DJSI）World」に、４年連続で選定されました。
「建設製品産業分野」（※２）のなかで、「社会面」が、３年連続で最高得点を獲得、「経済面」では「顧客関連管理」、「環境面」では「地球温暖化対策」が高い評価を得ました。
ＤＪＳＩは、米国Ｓ＆Ｐダウ・ジョーンズ社とスイスの社会的責任投資調査専門会社のロベコＳＡＭ社が開発した指標で、世界約2,500社のなかで、今年度は319社が「持続可能性にすぐれた企業」として「DJSI World」に選定されました。
ＴＯＴＯは、これからも、ＥＳＧ（環境・社会・ガバナンス）視点で企業活動を推進し、創業以来「水」にかかわる事業を展開してきた企業として「水まわり」から地球環境・社会環境に貢献し、“真に持続可能な社会”をリードしてまいります。

※１：投資を行う際に、従来の財務分析による投資基準に加え、社会・環境・コーポレートガバナンスといった企業の社会的責任も重視して投資をする方法のこと。
※２：59の産業分野ごとに選定される。

MEMBER OF Dow Jones Sustainability Indices In Collaboration with RobecoSAM

Present

TOTO News 5

2015年版TOTOドローイングカレンダーをプレゼントします

今年のカレンダーは、台湾北東部の宜蘭（イーラン）県を拠点に活動を行うフィールドオフィス・アーキテクツの建築ドローイング集をお届けします。黄聲遠（ホアン シェン ユエン）氏率いる同所は、黄氏を中心に同志のワークショップ集団を形成、建築設計や都市の再開発提案などを通して宜蘭県の発展に貢献しています。地域に深く根ざしたリアルな生活を通して、自己と現地の脈動との融合を目指す設計姿勢は、国際的にも高く評価されています。今回のカレンダーでは、ＴＯＴＯギャラリー・間での展覧会（※４）に先駆けその一部をご紹介します。

2015年版TOTO
ドローイング
カレンダー

プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

※４：７月には、ＴＯＴＯギャラリー・間（東京・乃木坂）で日本初の個展を開催、黄氏の来日講演を予定しています。

TOTO News 4

東陶（福建）と、TOTO INDIAで衛生陶器生産を開始しました

2014年７月、中国福建省、およびインド・グジャラート州において新規に衛生陶器工場が稼動しました。
ＴＯＴＯグループはすでに世界17カ国に進出（2014年10月）。現地のお客さまのニーズに合った製品を生産・販売する、「地産地消」を積極的に推進し、その土地に根ざし、末長く現地のお客さまに必要とされる企業を目指しています。
このふたつの新工場のスタートは、ＴＯＴＯの次世代を見据えた重要なステップとなりました。

TOTO INDIA
衛生陶器工場（グジャラート州）

TOTO News 3

第6回ロボット大賞「サービスロボット部門」優秀賞

将来の市場創出への貢献度や期待度が最も高いロボットを表彰する第６回ロボット大賞（※３）「サービスロボット部門」において、当社商品「ベッドサイド水洗トイレ」が、応募総数86件のなかで上位10件に与えられる賞のひとつである部門優秀賞を受賞しました。
使用者視点に立ったものづくりにより、“設置性の向上や臭気拡散の防止など要介護者のＱＯＬ（生活の質）の向上に貢献できる器具を、ロボット要素技術の積極的利用により実現した”と高く評価されました。

共同受賞：関東学院大学
建築・環境学部大塚雅之研究室

※３：主催：経済産業省、
一般社団法人日本機械工業連合会

第6回
ロボット大賞

→ www.robotaward.jp/

TOTO News 2

日本最大級の店舗総合見本市「JAPAN SHOP 2015」に出展

ＴＯＴＯは、日本最大級の店舗総合見本市「JAPAN SHOP 2015」に出展します。展示会場では、NEW MATERIALの新商品として、Ｓシリーズ水栓を展示します。新商品は、丸みを帯びたやわらかなデザインで定評のあるＳシリーズに、スクエアハンドルを基調にした新デザインです。同時展示の「タンクレストイレ 新ネオレストシリーズ（2015年２月発売予定）」とあわせて、ぜひ実物をご覧ください。みなさまのご来場を心からお待ちしております。

- 開催期間／2015年3月3日（火）～6日（金）10：00～17：00（最終日のみ16：30終了）
- 開催場所／東京国際展示場 東京ビッグサイト東4・5ホール
- 主催／日本経済新聞社

→ messe.nikkei.co.jp/js/

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

Cera Trading News

CERA TRADING

セラのお知らせ

大阪支店&展示スペース New Open !

セラトレーディングのホームページにて展示商品をご確認いただけます。

セラトレーディングでは、このたび関西における当社の拠点として、大阪支店&展示スペースをオープンしました。東京以外では初の出店となる当支店は「A New Presentation」というコンセプトのもと、展示スペースの商品に触れていただけるほか、情報発信の拠点として、新商品発表会やセミナーなどイベントを随時開催する予定です。みなさまのご来館を、スタッフ一同、心よりお待ちしております。

セラトレーディング

大阪支店

Cera Trading Osaka

●所在地／大阪府大阪市西区江戸堀1-5-16肥後橋MIDビル1F
●電話／06(6225)3640
●営業時間／9：25～12：00、12：50～18：00(大阪支店)
10：00～12：00、13：00～17：00(大阪展示スペース)
●休館日／土曜日・日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇

→ www.cera.co.jp

Book

TOTO出版

TOTO出版のお知らせ

『TANGE BY TANGE 1949-1959／丹下健三が見た丹下健三』

本書は、愛用のカメラで撮影された写真のコンタクトシートを通して、建築家・丹下健三が建築とどのように対峙していたのかを紹介する一冊です。これまでも、雑誌などで一部紹介されたことはありましたが、本書では年代を追い、その当時手がけていたプロジェクトや親交のあった人々など、氏の活動と共にその全容を紹介しています。

Present

くわしくは64ページをご参照ください。

- 監修／岸 和郎、原 研哉
- 編著者／豊川斎赫
- 定価／本体15,000円+税
- 体裁／270×310㎜、上製、252ページ、和英併記
- 発行日／2015年1月22日

→ www.toto.co.jp/publishing

Information

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

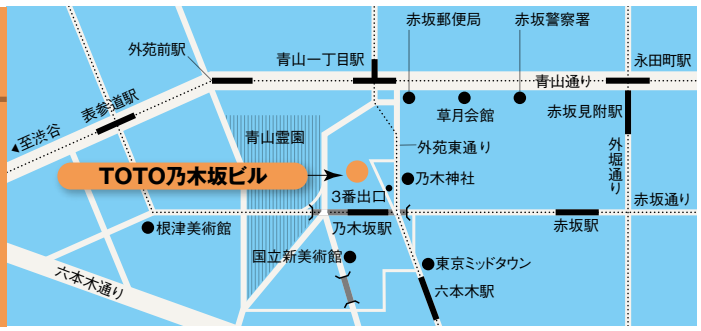
お申し込みはTOTO通信データ管理室まで → Tel / 093(513)6234　e-mail / toto_tsushin@jlink-net.com

＊法人あての送付となります。

セラトレーディング
Cera Trading
●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル1階・地下1階
●電話／03(3796)6151
●ファクス／03(3402)7185
●営業時間／10：00～18：00
●定休日／日曜日・祝日・夏期休暇・年末年始

Bookshop TOTO
Bookshop TOTO
●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)1525
●定休日／日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始

TOTO出版
TOTO Publishing
●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03(3402)7138
●ファクス／03(3402)7187
全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。



アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2015年4月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2015年 新春号

TOTO通信 2015年 新春号 第59巻・第1号 通巻505号
発行日:2015年1月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

NEOREST

NEW 2015年2月発売予定

商品についての技術的なお問い合わせ TEL: 0570-01-1010 受付時間: 平日 9:00~18:00／土曜日 9:00~17:00(日・祝日、夏期休暇、年末年始を除く) www.com-et.com

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
＊当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8170